

---

# 続・knight of monster ナイト・オブ・モンスター

神戒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

続・knight of monster ナイト・オブ・モンスター

### 【Zコード】

N1050X

### 【作者名】

神戒

### 【あらすじ】

ジャン・ステイールは幼い頃に、ケンタウロスの女騎士に命を助けられた。

「強くなれ」

その言葉から、彼は人生を決定する。

強くなり騎士になる。そう決意して身体を鍛え、数年が経過する。やがて肉体、精神共に成熟した少年は、あの女騎士が属していると  
いう国にやってきたのだが。

出会う女性は異種族ばかり。

ボーイ・ミーツ・人外ガール。ここに登場。

とりあえず色々とやりながら気長に続けます。  
気長に生暖かい目で見守つてください。

## プロローグ

春先のまだ肌寒い季節。しかし日中は、上着を羽織らずとも外を歩ける程度に、ほどよく温かい。

春の日差し。

されど、その空間だけは異様なまでに熱かった。  
大地は焦げ、熱を孕む。その上に立つだけで肉体は予熱で中までじっくり火を通されてしまうよつだつた。

青年は構えを解いて幅広の剣<sup>ブロードソード</sup>を振り下ろす。が、対応する人の手が、そこから鋭く伸びる長い爪が、その最中に剣の横つ腹を叩いて弾いた。

甲高い、金属音が響く。

同時に対象を斬り裂かんとしていた刃は、ちょうどその対象、目の前の女性の脇に落ちた。刃は情けなく焦げた石畳を勢い良く叩いて打撃し、砕けぬ故に跳ね返る力が腕へ戻る。衝撃が両腕をビリビリと痺れさせ、

「ちょっとは面白かつたわよ」

彼女はそう言って、青年の顔面を力強く押しこむように掘んだ。視界は暗転し、そして華奢な腕なのにも関わらず青年にはとても太刀打ちできぬ暴力が、彼の行動を束縛した。直接的な攻撃からではなく、ただ純粋に己の力を誇示するだけで、適わぬと理解させていた。

そして腰に引きつけた腕。貫手を作る手は依然として爪を鋭くさせたまま。

「もつと強くなつてから遊びたかったわね」

毛皮のベストを羽織り、頭には中身のない猪の顔を乗せる。ネットのような網目だけの衣服をまとい、エナメルのズボンを履く。妙に露出度が高く、またそのあらわになる肉々しい肢体には日のやり場に困つたが、今ではもうその姿すら見えない。

黒目しかない瞳がギロリと青年を睨む。

もう終わりだ、ここで死ぬ。

そういういた思考を、恐怖の中で、あるいは絶望の中ですら無く、どこか他人事のように感じる自分に思わず呆れた。

体の中の、魂や心といったモノが熱くなるを感じた。

ここで死んだら後ろの少女はどうなる？ 新たな獲物としてこの女に殺されるだけではないか。

冷静な思考はそう告げると同時に、されど己の死の予感を認めなかつた。

そう、おれは死はない。

漠然とそう思う。

根拠なんて無い。

だが死はない。

「おれは、お前の暴走を止める……っ！」

女が腕を振り抜いた。

同時に、頭の中のもつと奥、芯たる部位が熱く、熱く、熱くなるのを感じて。

「やつと来たわね、だけど……ッ！」

「降り注げ！ サウザンド・ウェイブ 数多の疾風ツ！」

女が楽しげな微笑を崩して表情を歪めたのはその刹那だった。顔を掴む腕を少し引き、そして突き飛ばすように青年を弾いた。

同時に大地を弾いて彼女は後退。その場に僅かな残像を見せて、彼女は既に石畳に傷一つ無い位置で跪いていた。

その直後に降り注ぐのは、半月状のかまいたちだった。

標的を仕留められずに虚空を切り裂き大地を刻む幾多の真空波。

彼は勢い良く背後に吹き飛ばされながらそれを見て、

「つ？！」

壁もないはずの位置で、何かが背中を打つた。滑空を遮る障害物は人の形であり、そして力強く青年を受け止める。やがて慣性の力も失われて着地すると、その”人の身体”のあつた部分は妙に高い

位置だつた事に気づく。

「下がつていろ、一般人」

凛とした声が届く。

透き通るような金髪を持つ女性。それを後頭部の高い位置で一纏めにし、身体には甲冑を纏う。装備する武器はその身の丈ほどの槍。 ”馬”の下半身は、薄い生地の下着を履いた腕に鉄の佩楯はいでを纏つて守られる。

彼女は”ケンタウロス”と呼ばれる、異種族だ。人の上半身に、馬の下半身。その異形の姿は、されど力強く凛々しく雄々しい。彼女はケンタウロスなれど、この国を守護する王立騎士団の一人だった。

「き、騎士様……！」

ケンタウロスが睨む先、”獣人族”で猪科の女性は、前屈姿勢で様子を伺っていた。

青年がそれを確認する中で、気配は声と共に現れた。

「そうそう、お子ちゃんはあたしたちに任せればいいのよ」

青年を挟むようにして現れた女性。

その身の丈は一般人とほぼ同等だが、その両腕は人ならざる鳥の翼だつた。さらに羽毛滾る腿を経て、足さえも鳥のソレである。彼女も同様に異種族であり、ハルヒュイア鳥人と呼ばれる存在だ。

人を凌駕する聴力、視力を持つて尚飛行能力を有する。また種族としてもひどく友好的で、だが戦闘能力はそつそつ大きく離れているというわけでもなかつた。

「でもまあ、こんなに出てくる必要はないのでは？」

うねるツノを持つ女性は、それ以外にも規格外に豊満な胸と、そして獸を直立させたような毛皮を纏い蹄を持つ足が特徴的なのはミノタウロス。甲冑を装備できないのか身体に張り付くような衣服一枚を着て、腰巻を装備するだけの姿。さらに異種族の特徴として怪力が挙げられ、それを誇示するように身の丈ほどの戦斧を肩に担いで鳥人の隣に立つた。

「いいんじやないの、暇だしな。それにアイツだつて常連客だ、門前、つつーか門内だけど、さすがにそろそろもてなすべきじゃないか？」

ケンタウロスの影になる位置に来たのは、一際小柄の少女だった。明らかに自分よりも巨きな大剣を背負うが、その剣先は既に地面を削っている。が、彼女ドワーフ族の作る道具の全ては逸品であり、『魔術』を用いて特殊な効果を持たせる道具ばかりが生まれている。例えば筋力を増加させるものもあれば、彼女の大剣のように、硬度、密度、素材がそのままにながらも質量だけを減らす事も可能である。

「どういか女郎蜘蛛おひめさまが待機してゐるし、ちやつちやと終わらせない？」  
昨日徹夜で、彼女イライラしてんのよ」

そう提案したのは、全身をゆでダコのように真っ赤に染め上げる女性だった。

頭に対となる一本のツノを誇り高く聳えさせるように生やす彼女は、胸当てとショーツだけを身につける大胆ないで立ちでドワーフの隣についた。

彼女、鬼族オーガは尋常ならざる身体能力を持つ。純然たる戦闘能力ならばこの集団の中でも随一であり、それゆえに切込隊長トップアッカに任命されることが多い。が、その場合は切込隊長だけの活躍で戦闘が終えると言われるほどに強靱だ。

まさに鬼というくらいに強い。容赦もない。

ケンタウロス、鳥人、ミノタウロス、ドワーフ、鬼。

総数五名の女騎士。それぞれ人に似て非なる者でありながらも、その姿は圧巻だった。そして異種族と呼ばれる存在でありながらも、王立騎士団の屈指の実力者だった。

やがてそれぞれが揃い、構える。

「ま、そういう事だからキミらは下がつてなさい」  
槍を構える。同時に、ケンタウロスの雰囲気が一気に変わった。殺氣が迸る。鋭い眼光が、まるで獣人族の女性を射ぬくようだつ

た。

「さすがに予想外。私もここで退かせてもらつわッ！」

そう言つが早いか 魔術か、単なる身体能力か。彼女の言葉を理解する頃には既に、その姿は忽然と失せていて、

「じゃ、ジャン！」

ふつりと、緊張の糸が切れたようだった。

首を締められたように、意識が不意に遠のく。深淵に蹴落とされたように身体が地面へと沈むその中で、背後で待機していた少女がそう叫ぶのを聞いて 青年、ジャン・ステイールの意識はそこで途絶えた。

ここアレスハイム王国が存在する大陸の地平線上がひび割れ巨大な”溝”が現れたのは、今から約一五年前。全世界を混乱の渦に陥れた世紀の大地震を伴つてそれが突如出現したというは、この世界で生きる人間ならば知らぬ者はいないほど有名な話だ。

溝は階段状になつていて、そしてその深淵の最中、階段の突き当たりには巨大な門扉<sup>ゲート</sup>があつた。

そこから現れたのは無数の『異種族』。

架空の生き物だと信じてきたケンタウロスや鳥人、ミノタウロス、ドワーフ、鬼……さらに無数の異様な、半分は人であつたり、完全な”魔物”<sup>モンスター</sup>の風体をするそれらが現れた。

彼らは知能を持つ。人間と同等、あるいはソレ以上の超高度な知的生命体だった。

そして彼らが望んだのはこの世界。

ふっかけたのは戦争。

ではなく、友好的な関係を築く為の慈善活動<sup>フィランソロピー</sup>だ。

荒れ果てた土地を潤し、枯れ果てた河川を潤し、汚れた大地、海を浄化。魔法のような業の数々で、人類の文化は加速度的に進展して、今がある。

持つもの、持たざる者は居るが、個人が持つ、根拠不明寮の奇跡の業である『魔法』が、個人の才能<sup>センス</sup>が無くとも努力次第で使用可能になる『魔術』が人々の手に渡つたのも、その異種族の出現と同時だった。

魔法とは、一人が一つだけ持つ特異な能力。だが持たざる者が殆どであり、全人口を見てもその一割に満たぬ存在である。

魔術とは、先ほどの真空波がそうであるように、『精霊』という者の力を借りて起こすもの。例えば『炎』や『雷』、『水』や『氷雪』、あるいは『具現化』を可能とする業であり、それは肉体に紋

様を刻んで”世界と契約”する事でまず扱える段階になる。

が、『サウザン・ウェイブ数多の疾風』のように本格的に使うには、惜しまぬ努力が必要となる。

世界各国。それでもやはり異種族という存在を拒むことは多い。

世間に馴染み、『魔法使い』を主として構成する騎士団は各国に必ず在るもの、そこに異種族を含めるのはやはり異例な事だった。それは、ここアレスハイム王国が、その異種族たちとの外交官的な役割を持つことが理由だった。

たとえ異種族と人類が対立したとしても、ここだけは中立を貫く。そう契約したのは、やはり今から一五年前だった。

このジャン・ステイールは、幼い頃にビゴーの帝国軍によつて故郷を焼き尽くされた。強奪して食料、水を補給。ついでに金銭を奪い、村人を殺害してから村々を焼き払つていった。追手はその村での補給が不可能になり、さらにその残虐性を見て追跡を諦めたという。

彼はその追手の部隊に、その中に居たケンタウロスの騎士に生き残つていた所を助けられたのだ。

「ジャン、またトレーニング？」

そう声をかける少女も、同じ故郷出身の生き残りだ。

二人はそれから近く、この王国の支援下にある街の児童保護施設で十二歳まで育つた。義務教育の制度のお陰で、彼らはまともに文字を読み書きでき、極めて一般的な幼少時代を過ごすことが出来た。

「ああ、身体がなまつちまうからな」

それからは自立生活だ。

一人でドワーフが営む炭鉱、鉱山、採石場で働き、ジャンは現場仕事を、『サニー・ベルガモット』は寮で寮母手伝いとして過ごしてきた。

かくして生き抜き、六年後。

十八歳となる少年少女は、騎士になるべくこの王国にやつてきた。騎士の求人は毎春行われる。募集要項は極めて簡単で、『十八歳以上』であり『心身共に健康』で、『文字の読み書き』ができ『特殊技能』を有すること。

特殊技能は碎いて言えば、魔法の有無である。

サニーは簡単ながらも『治す』力を持つ。

ジャンはと言えば。

「つと、一先ず腕立て伏せは終わりだ」

規定の回数を終えた所でジャンは起き上がり、肩で息をしながら質素な寝台に腰をかける。

共同住宅で寝食を共にするサニーは、そんな彼の自室で、彼の隣に腰掛けた。

セミロングの茶髪が揺れ、琥珀色の瞳がジャンを捉える。尖る長い耳は、彼女がエルフ族である証拠だった。

容姿端麗、頭脳少し明晰。さらに弓を自在に扱い、治癒の力を持つ。

天はいくつ彼女に与えれば気がすむのだろうかと嘆いたのは、ジャンが物心ついたその時だった。

彼が持つものといえば、ドワーフ族から鑑別にと渡されたブロードソードが一振り。特別製だから魔術を扱う為の道具にもなるが、それだけだった。

「もう、明日が試験なんだからね？ 少しは休まないとダメだよ」立ち上がり、机の上に乱雑に置かれる赤い本を手に取る。表紙には『毎日十分勉強するだけで絶対に受かる！ 王立騎士入試対策』傾向と対策』と立派な御託が並べてあるが、僅か一時間で理解できるほどに内容は薄っぺらく、一般常識程度の事しか綴られていなかつた。

こういった商法があることを、鉱山で働いていた彼は知らない。購入時の店員の嘲笑の意味を理解したのは、この本の第一章を読み終えた頃だった。

昼食三日分の値段が一時間で潰された。

しかも一切有意義にすらならない内容で。

「わかつてゐけどさ。落ち着かなくて」

すり切れるほどに読んだと思うそれを、また読み始める。いくら内容が稚拙だつと、もしかするとコレが本当にヒントになるかもしれないのだ。とりあえず頭に入れておくだけでも損にはならない筈だ。

意識を失った後は、この寝台の上で寝ていた。共同住ままであるのケンタウロスが運んできたりしく、それから半日ほど眠りかけていたらしい。

本当なら礼を言いに城まで行くべきだつたが、どのみち騎士の入試試験があるのだ。わざわざ赴かなくとも逢える、はずである。ちなみに試験で合格してもすぐに戦場へ、というわけではない。一年制の学校に通い、そこで知識を蓄え肉体を鍛える。そこで卒業して晴れて騎士なのだ。

「わくわく？」

「そわそわ」

「でも楽しみもあるんでしょ？」

身体にひつつき、体重を掛けるようにしてサーーが言った。

「まあな

自分のこれまでの力が試せる。

ケンカもなく、ただ鍛えるだけ鍛えてきた今までの全てを出せるのが、明日の試験だ。

心配もある。

楽しみもある。

しかしやはり、

「サーーは？ 運動神経悪いってわけじゃないけど、得意でもないだろ？」

彼女が一番心配だつた。

騎士を目指した理由が『ジャンが目指すから』であり、仮にジャ

ンが落ちれば『辞退する』といつ。騎士を舐め腐った考えだが、そんな彼女がこれまで支えになつてくれたのは確かだつた。

だからサーーと一緒に騎士になりたい。

あの騎士に恩返しがしたいという事もあつたが、今ではそれが一番の願いになつていた。

妹のような存在。ゆえに、たつた一人しか居ない大切な家族だ。互いに助けあつてきたからこそ、その心は繋がり、今に至る。この触れ合いだつて男女の性的な意味ではなく、もはや動物のスキンシップのようなものだつた。

「わたし? そうだね、わたしはねえ、実はジャンに隠れてトレーニングしてたりして」

「へえ、どんな?」

「えへへ、筋トレとか、あとね、素振りとか」

「割りとちゃんとやつてんだな。頼んでくれればもつと指導とか出

来たのに」

「やだよ、だつてジャン、人一倍頑張つてるからあんまり迷惑かけたくなかつたもん」

「いや、そんな事……」

「次の日仕事なのに、夜中に抜け出して走りこみしてたり」

「そ、それは……」

思わず口ごもる。

まさか見られていたとは思わなかつた。

それこそ、彼女の言葉を借りるが、人一倍頑張つてるサーーに心配を掛けぬために影でひつそりとやつていたのだが、それは無駄な努力になつっていたようだ。

お陰で今では、年齢の割には随分とがつしりとした体形だし、体力だって自信がある。だが基準がわからない以上、試験に余裕を持てるることはなかつた。

「でもほら、ジャンは頑張り屋さんだから絶対受かるよ!」

彼女がいるから、ガチガチに緊張して集中できなくなることがな

い。

「ああ。サニーもな」

「えへへ、ジャンに言われると嬉しいな」

言つて、頭を肩に乗せる。この上なく嬉しそうな顔で、彼女はこのひと時を過ぎていった。

その後、適当なトレーニングを一人で行い、夕食を済まして、少しばかり早めの就寝となる。

適度に疲れた身体が休息を求める。そのお陰で高ぶつた精神はいくらか落ち着いて、夢の中へと落かけていた。

サニーが、「どうせだから一緒に寝る?」と聞いてきたが、なにが”どうせなんのか”分からぬし、彼女だつて年頃の娘だ。淫らな獣となる男の本能を殺しきれていらないジャンが、そんな事を二つ返事で許可できるわけがなかつた。

いくら妹のように思つていたつて、女の子のやわらかさにはドキドキするし、髪の石鹼の香りには虜になる。今まで仕事もあつたら尋常ならぬ運動量で誤魔化してこれたが、今度はそうにはならないだろつ。

騎士を侮つているわけではないが、それでもあの炭鉱や鉱山での苦行じみた活動は無い。もしそうなつたら、

「死ねるな……」

ドワーフの力持ちが大勢いたからこそ、それらが創りだす特別な魔術稼働の道具があつて尚あのキツさだ。同等の苦行など、この街で一ヶ月ほど過ごした適度な気楽をからそつちへなんて、とても堪えられるきがしない。

もつとも、それは杞憂に過ぎるだろつが　。

コンコン。

不意に音が、静寂を司る白室に響いた。

コンコン。

大した間も置かずに、もう一度。

扉ではなく、窓を叩くような軽い音。壁に寝台が添えられるような配置だ。窓は、その壁に埋め込まれている。だから思わず目を開けてそちらに視線を向ければ、見えてしまうのだ。

月明かりを遮る、妙な人影。

息を呑む。

微妙な尿意ゆえに我慢していたことが悔やまれるほど、心臓が凍りつき、全身の血液が凍てついた。

「つ……！？」

悲鳴が出なかつたのが、不幸中の幸いといつものだらう。

「コンコン。

ノックは繰り返された。

『ちょっと、開けてつてば！』

窓越しにこもる声は、女の子のソレだつた。

強気に、命令口調。

どちらにせよ悪い予感しかなかつたが、これ以上ノックを繰り返されてサニーを起こすわけにもいかない。

ジャンは身体を起こして布団を剥ぐと、寝台の上で膝立ちになつてカギを開け、窓を開け放つ。と共に、その影は勢い良く部屋の中に飛び込んできた。

寝台を飛び越えて床に着地。両手を天井高く伸ばして直立。まるでその妙技を褒めてと言わんばかりの笑顔をジャンに向けていた。

「おーすごいすごい」

やるせない拍手だつた。

だといふのに、彼女はとてもうれしそうな笑顔だった。なにやら胸が痛くなるが、ジャンは気にせず続けた。

「どちらまで？」

「あ、えーっと……あたしの名前はテポン」

コウモリのような羽根を折り曲げて収納する。ソレ以外の特徴といえば、炎のように真つ赤な瞳や、サニーといい勝負の少し小柄な

女の子らしいし肉体程度しかない。またエナメル質の、腿まで伸びる妙に踵の高い靴や肘までの手袋という異文化の服装しか無かつたが、この街で出会つた異種族の中で一番人間に近い少女だつた。

何族なのかと聞いてみたかったが、異種族とそれほど深く関わった経験がない。ドワーフはいい歳の中年男性 といつても寿命の関係で殆どが百歳超え だったから、会話は普通の人間とあまり変わらなかつた。

だから”違う部分”に関して、どこまで聞いて良いのかが未だに分からぬのだ。

異種族初心者というところだろう。

興味が人一倍あるのは、いつかのケンタウロスのおかげかも知れない。

「お、おれはジャン・ステイール……。おれに何か用?」

「え、まあね。ほら、この前、獣人のボーアと戦つてたじゃない?」「ボーア……? あの炎の魔術使ってたヤツ、だよな」

「うん。知らないと思うけど、あのヒト毎月、不規則だけどね。来るの。街を壊すけど、門の近くだけ。人を殺すけど巻き込まれたヒトだけ。確実にアブないんだけど、すぐに逃げちゃうから捕まえられないのよね。なんで來るのか、理由がわからんないし」  
彼女は丁寧に説明してくれる。

自分より少しばかり年下に見える彼女はやはり華奢で、だが異種族ならではの身体能力を持つのだろう。

だが、わざわざ聞いても居ないことを補足してくれるあたり、(こいつ、イイヤツかも)

そう思えた。

「あ、それでね。特に用つてわけじゃないけど……あんた、騎士を目指すんでしょ? 明日試験だし」

「ああ、その情報をどこで仕入れたか甚だ疑問だが、その通りだ」寝台の上であぐらをかく。彼女は腕を組んで、ジャンを見下ろした。

「警ら兵のなんとかってヒトが教えてくれた。あの、ヒゲがす」

ヒト

「隊長じゃねえか……」

地獄耳のヒミリオの名を関する彼は、街の、そして国が保有する軍の主力として活躍する警ら兵の隊長だ。もつとも全てを統率する隊長という訳ではなく、いくつか分けられた部隊の長である。だがやはりその実力は折り紙つきで、特に周囲に近づいた敵の足音を聞き逃さず、逆にそれを利用して勝利を收める 奇襲対策のプロであることから、その二つの名が冠されていた。

だからもちろん、ジャンの話を聞いていてもなんらおかしい話ではなかつた。

「えつと、テュー・ローンつつつたつけ？」

「テポンよー。あんたの脳みそ醣酵はいじゆしてんじやないの？」

「おお、おれの頭は一酸化炭素でパンパンだぜ」

「もう、冗談はそこまでね」

腰に手をやり、呆れたように首を傾げる。

もし二三でため息を吐かれたとしても、寝ぼけた頭だから傷つくことは無いだろう。多分。

「あたしはもういいんだけどね。ただウチの連れが騎士志願で、たぶんあんたと一緒に試験を受けることになるのよ。素質はあるように見えるんだけど、どうにもヘタレっていうか、気が弱いつてわけでもないんだけどね……」

ははん、とジャンが鼻を鳴らす。

そういう事がと彼は察した。

「良かつたら試験だけでも仲良くやってくれない？ 名前はトロス。黒い髪で、見た目はニンゲンそのもので、まあそわそわしてるから、見れば分かるわよ

「トロ、そうな名前だな」

「せつかちだけどね。まあ、飽くまで良かつたらだし、気にしないでもいいわ。邪魔したわね」

なんでもないような顔で彼女は寝台を飛び越えて、窓のサンへと跳躍した。身軽なジャンプで、まるで浮遊するように優しくそこをとどまる。窓の枠を掴んで身体を支え、首をジャンへ回した。

「せっかく起きたんだ。仲良くやつとくよ、テコポーン、だけ？」

「テポンよ。ふふ、ありがと。ジャン・ステイールね、覚えとくわ」

窓の外へと身を投げる。その後にコウモリの羽根を広げて、風を起こす。ヒ、風もないのに空中でとどまり、彼女は頬を赤くして微笑んだ。

「騎士試験、受かりなさいよ。あたしは”まだ”だから、今年受かればやせしくしてあげる」

「よく分からぬがありがとよ。風邪、引かないようにな。薄着だからさ」

「あたしは大丈夫よ。年中コレだし。あんたもね」

「あいよ。おやすみ」

「ええ、おやすみなさい」

彼女は控えめに手を振つて、また羽根をはためかす。するとその身は瞬く間に上空高く浮かび上がって、闇の中に影すら残さず消えていった。

ジャンはそこで寒さが染み込んだ身体を震わせてから窓を閉め、カギをそのままにして寝転んだ。

ただそれだけの会話で疲れたのか、その余韻もそこそこに、ジャンの意識は可及的速やかに夢の世界へと転げ落ちていった。

## 入試試験

「ねえジャン見てみて！ お城だよー！」

「ああ、いつみてもすごいよな」

噴水のある広場を抜けて、大通りをしばらく歩いた先に、半円に広がる広大な空間がある。それだけでも十分驚きだといふのに、その突き当たりには門があつた。

そしてその向こう側にあるのが巨大な城だ。

見上げるだけで首が痛くなるような、莊厳で威圧的な雰囲気。でありながらも上品で、自分なんかが足を踏み入れて良いのか戸惑うほどに格式高いのが見るだけで理解できる。

少し高い丘の上に立っているのか、城は見下ろすように、あるいは見守るように街の奥にある。門の付近には警ら兵が槍を天に突きあげて構えており、その脇には大きな看板が設置してあつた。

「えーっと、『試験会場はこちらです』だつて」

矢筒と弓を背負いながらジャンの手を引く彼女は、そう教えてくれる。

同様に剣しか持たないジャンも、彼女に連れて行かれるままに、その開け放たれた門の中へと進んでいく。門の警ら兵に会釈をすると、「頑張れ」だの「期待している」だと妙に励ましてくれる言葉に嬉しく思いながら、やがて敷地内へ。

この街に来た当初は観光客気分でぶらぶらと歩いてみて回つたが、それでも城の中ばかりは入つたことがなかつた。

そしてまた、まさか試験が城の敷地内で行われるなんて考えても見なかつたが……。

「うわあ、けつこ一人いるねえ」

「本当に。百人以上いるんじゃないか？」

「でも大丈夫だよ。ジャンなら、ね」

「あまり自信を持ちすぎるのもどうかと思つけど。一緒に合格する

んだ、サニーだつて大丈夫さ」

一応、合格すれば学校に通うことになるのだ。学校からさらに騎士へと昇格する時点で”ふるい”にかけられるとしても、騎士養成学校に入学させるのは一定数という数が決まっているはずだ。

となれば、一クラス三 人前後だとすれば……推測できるのは三人から六 人が限界。何クラスも育てる時間も無いだろうし、多ければ多いほど国の負担も大きくなる。

そしてまた、ジャンのように自分が”特殊技能”<sup>まほりつ</sup>を使えるか否かすら分からぬ者も多いはずだ。

一応試験内容に『適性検査』があり、その力が扱えて居らずとも、本質的にはその力を持つている。その有無を確認によつて騎士になれるかが決定的になる。が、その検査は最終試験で午後に行われる。恐らく精神、肉体ともに健常であれば警ら兵として推薦するためなのだろう。

ともかく、今は考えても無駄な事だ。

筆記試験はあるかどうかも疑わしいし心配だが、なるよつにしかならない。

今までだつてそうだつた。

ジャンはそう帰結すると、大きく息を吐いて、愛しい妹（仮）の頭を優しく撫でてやつた。

「頑張れよ、サニー。試験中はずつと一緒にわけにはいかないし、自分の力を試すしかないんだからな？」

「もう、子供扱いしないでよ！ 私だつてね、結構やるときはやるんだよ？」

「はは、頼もしいな。それじゃおれは人探しするから、適当にそちらへんぶらついててくれ」

「人探し？ ジャあ私もついてく！」

「んー、まあ、大丈夫か……な？」

トロ そうな名前でせつかちという印象しかない相手だ。

黒髪ということだったが、今朝起きた時には窓に手紙が挟まつて

いて『金髪に染めたみたい』との追加情報があつたから、それを念頭に置いて探せば良いのだろうが……。

周囲を見渡せば人だらけ。

それでも門のすぐ内側の、城の敷地内にしてみればちょっとした空間に集まっている彼らである。

甲冑を着こむもの。ラフな、布の服だけで剣を持つ男。あるいは外套姿など。

また異種族は集団の一割ほどしか居らず、まるで猪をそのまま人型にしたような男や、トカゲのような皮膚と尾を持つ蜥蜴人族の女など。そう種類が多いわけではなく、他にはドワーフの少年や鳥人の少女などありふれた種族ばかりだった。

周りを見るだけで、この中から探すのかとうんざりする。だがその中で、一人だけ妙な男を発見した。

「ねえジャン？」

サニーもそれを視界に入れたのだろう。不安気に、手を握る力が少し強まるのを感じる。

「すまん、たぶん探し人見つかった」

今度はジャンが手を引いて、人ごみをかき分けその男へと近づいた。

短い金髪頭で、前面にボタンがつく黒い外套を着る男。彼は落ち着かない様子で、その場をグルグルと回転していた。

なぜ引き受けてしまったのだろうと後悔しても時既に遅し。

保護者は随分とまともな風だったのに、こっちがコレでは そ う思つても、約束は約束だ。

物理的に無理というわけではないのだから、いい加減決意するしか無いだろう。

だから胸いっぱい息を吸い込んで、口を開けた。

「あ、あの、さ。ちからちょっといいか？」

男には妙な斥力ちからがあるらしい。

彼の周りには人がおらず、半径一メートルほどだが空間ができる

いる。

人ごみがあまり得意ではないジャンにしてみれば羨ましい限りだが、こういったいかにも変だという条件付きで得られる力だつたら願い下げだつた。

だからその、ちょっと変な人に声を掛けた刹那に周囲が無意識に少しだけ緊迫するのが、彼にも良くわかつた。本来ならばそこに居た人間なのだから。

果たして男は回転を止めた。

ちょうどジャンと対面するように停止し、恐らく長い間回っていたであろう箸なのにしっかりと、鋭い視線を彼に向ける。

瞳は燃えるように紅く、肌の色はジャンと同じ。背中にコウモリの羽根がある以外に、ソレ以外の特筆するべき特徴は一切ない。まさに入間そのものだ。羽根さえなければそう間違えていたことだろう。

「なんですか？」

男は冷淡に、直球に聞く。

せつかちで、どこか人見知りであるような事を聞いたが気のせいだつたか。

そう思ったのも束の間、そんな男の膝は驚くほどに小刻みに震えていた。

気がつけばガチガチと顎を震わせて歯を噛みあわせているのすら見える。

純粹に、彼はジャンに怯えていた。

「あー、いや。そんな身構えないで欲しいんだけど……ほら、キミ一人だつたし、もし良かつたら試験始まるまでだけでも話したいなって思つてさ。おれも緊張しちやつてて」

ははは、と発した乾いた笑いは、果たして良い方向に事態を招いた。

「あ、あー！　だよね、僕もちょっと緊張して、落ち着かなくてさ。知り合いも居ないし、姉さんが大丈夫って言つてたけど、でも全然。

ガチガチで

「はは、良かつた。おれはジャン・ステイール。んでこいつちが」

「サニー・ベルガモットです。よろしく」

代表してジャンが手を差し出すと、彼は快くソレに応じた。  
「僕はトロス。きみ人間たちとはちょっと違うけど、仲良くしてくれたら嬉しいな」「

街の通りのような幅広の道。その両脇は芝生が敷き詰められており、城に近づく位置になると噴水があるちょっとした広場がある。

それからややあってからやってきた甲冑姿の男が約百人余りの集団をそこにまで移動するように指示し、また待機の命があった。

「最初は何するんだろう。スティール、分かる?」

「ああ、一応募集用紙みたいなのが貰つたからな」

トロスにきかれて、ポケットから持参した紙を取り出す。

そこには集合時刻と場所、そして行われる三つの試験がおおまかに記されており、恐らく自主的にここに集まつた者はそれを持つているだろ?。

姉に為す術もなく連れてこられた彼は持っていないし、それも仕方が無いことだ。

「えーっと、第一次試験が身体検査。次が体力で、最後に適性検査だつてよ」

「身体検査か……。ねえジャン、私の検査員が男の人だつたらどうしよう?」

「自分の並ぶ列を間違えることで回避できるから安心しろ」

「でもそれだとだいぶ時間がかかるよね?」

「まあダベつてりやいいだろ。次が始まれば招集かけるだろ?」  
そう提案した最中の事だった。

「注視せよ!」

甲冑姿の男がそう叫んだ。

噴水の縁に仁王立ちして、まるで英雄ヒーローをして遊ぶ子供のよ

うに腰にてをやつて。

兜を外して足元に置き、鼻の下にちょっとしたヒゲを伸ばした中年男性は、瞬く間に静まり返る集団を見て頷いた。

「ここに居る者はみな少なからずとも騎士を志したのだろう。その給金が田当代の者、騎士という存在に憧れを持つ者、ただ流されままにここに居る者……それこそ、ここに立っている貴様ら一人ひとりに別の理由があると言つても過言ではないはずだ」

騎士らしき男は語り始める。

ただそれだけで、にわかに和らぎ始めていた空氣は瞬く間に引き締まる。

彼は一拍置いてから続けた。

「騎士とは誇り高き戦士の肩書きだ。ただ乗馬し剣を、槍を振るい戦う職業だ。貴様らはこれからそれになる。だがソレ以上に、騎士という存在は最上に氣丈で氣高い。騎士とは職業だが、職業ではないとも言える。魂が、心が気高く誇り高く成長する！ 貴様らにはそれを感じて欲しいと思つ……簡単だが挨拶を終わりとする。噴水の後ろに簡易小屋をこしらえた。貴様らは男女に別れ、それぞれ列を成せ。第一次試験はそこで開始する。以上！」

騎士になるまでの試練。

そのまま始めがこれから開始される。

男の言葉の後に、各々はその表情をキッと鋭く引き締めて円形の噴水の左右へと流れしていく。

「それじゃ、またね！」

十数人ほどしか居ない女性の列に、サニーは紛れていく。ジャンは手を擧げる彼女に返事をしながら、トロスと共にぞろぞろと動き出す列の最後尾についていった。

トロスが小屋に入つて数分が経過する。

列が出来上がってから既に一時間が経過していて、寒空の下、いくら晴れ間で日差しが暖かいと言えどもいい加減身体が冷えてき

た。

後ろではまた噴水付近に戻つていった志願者たちがたむろし、緊張がいくらか解れたからか、誰もが親しげに会話を楽しんでいた。それはサーーも例外ではなく、さっそく友達が出来たのか、蜥蜴人リザードマンの少女と対面してなにやら話し合つていた。

ジャンは最後尾であり、後ろには誰もいない。強引にでも割り込めばよかつたのかもしれないが、わざわざこんな所で心証を悪くする必要も無い。

彼は腕を組んで縮こまる。歯がガチガチと噛み合つて音を鳴らし始める頃に、トロスは安堵したような表情で扉を開け、外に出てきた。

「ステイール、君が最後か」

「最初じゃないだけマシだよ」

「扉の前で声を待つんだ。入れつて言われたら、入ればいい」「ああ」

頷き、トロスと立ち位置を入れ替える。

やがて眼前に扉が迫り、彼はそこで足を止めた。

ひとつ大きな深呼吸でもして心を落ち着かせておこう。そう思つて息を吸い込むと、声がかかつた。

『次の者、入れ』

「つ、はい！」

肩を大きく弾ませてから、息を吐く。

彼は扉を二度叩いてから、開け、中へと入つていった。

「失礼します」

扉を閉め、頭を下げる。

自室より少し広い程度の小屋には、簡素な椅子と、その前方に机があつた。書類が何十枚と重なるそこには小柄な少女が居た。左右の瞳の色が違う、ただそれだけの違いがあるだけの少女だ。なぜこんな所に幼い子がいるのだろうかと思うのも束の間、記憶が、その正体を見破つた。

左右で長い髪を括る少女。それはドワーフ族の騎士だ。一度だけ見たことあるその姿は、以前獣人の襲来時に駆けつけた内の一人であるからだ。

「ん……、お前、どこかで見たことがあるな」

書類に羽ペンの先を押し付けながら彼女が言つた。

「と、まあいいか。お前が最後か？」

「はい！」

「そうか。まあ座れ」

「はい、失礼します」

一札を置いて、椅子の左侧へ。そこでその手前に移動し、ぎこちなく、操り人形のように腰を落とした。

ドワーフの少女は奇妙なものでも見るような目で彼を蔑みながら、その口角を少しだけ釣り上げてから咳払いを一つ。一呼吸を置き、口を開いた。

質問されるだろう事はおおよそ予測してきたし、その返答は全て暗記してきている。

これで問題はないが、一つだけ非常に困ったことが現在起きてしまっていた。

その返答を全て忘れてしまったことである。

その原因は、この少女の正体を思い出す過程により、集中が別方向に向いてしまったことだと考えられた。

(ええい、ままで)

そう決意する。

見透かしたように、彼女の言葉はその直後にやつてきた。

「えーと、ジャン・ステイールで間違いない？」

「あ、はい」

「住所はアレスハイムでいいんだな？」

「あはい」

「これは元々か？ この街で生まれ育つたっていう？」

「いえ、元々はその、コロンの街で過ごしてまして、十八になつた

「で騎士になるべくここに越してきました」

「ほう、と唸る。

「ふう、と胸を撫でた。

「いい心がけだな。なら寄宿舎でなくとも良いわけだな?」

「あ、いや……共同住宅は結構金銭面で負担になるので、貯蓄が結構キツい事になります、ですね……」

「血族の家に転がり込んだわけではなく、共同住宅の一室を賃貸しだつていう?」

「あーまあ。肉親居ないんで」

「それは、すまない。悪いことを聞いた」

「いえ、大丈夫ですよ。慣れっこですし」

彼女はそれから少しだけペンを動かして何かを記入した。カツカツと書きこむ音だけが空間内に響き、妙な緊張に包まれる。

彼女は少女だが、それでも大人っぽい言葉遣いだ。そして事務的である。

あの時もそうだったが、今回は特に固い口調だった。

だからそのせいで緊張が助長されているのかもしれない。

「まあいい。本題に入ろう」

彼女は言い、そしていよいよ彼は決意する。

「お前はなぜ、騎士に志願した?」

「ごくりと喉を鳴らしツバを飲み込んだ。

妙に心臓が高鳴って、耳元で脈動が聞こえるような気がした。

乱れる呼吸を察されぬように息を飲み、彼はようやく口を開く。

「おれは昔、故郷を滅ぼされました。その時に、生き残りだつたおれを助けてくれたのが……強くなるという事を、生きる希望を教えてくれたのが、騎士さまだつたんです。ケンタウロスの、金髪で、碧眼の……。そして強さの象徴が騎士になつたのも、その時でした。だからおれはそれから身体を鍛えて、ようやく今になつたんです」「騎士になつて何かをするということが目的ではなく、騎士になることが目的という事でいいか?」

「いえ。おれは騎士になつて人の助けになりたいんです」「具体的には？」

具体的に 横暴すぎる戦火を出来る限り抑えたい。だがそれを

成すには個人では到底不可能だ。

ならば街で、困っている人の手助けになりたい。しかし、であればわざわざ騎士にならずとも出来る事。

どじのつまり、困窮。答えは無く、正解は存在しない。

おもわず宙を泳いだ視線を、彼女は狡猾に見逃さなかつた。

「つまり、漠然と”誰かの助けになりたい”と？」

その通りだ。

人の助けでもない、確かに村を焼き払うような事を止めたいことは確かだつたが。

彼が助けたいのは、その、強くなつた力で手伝いたいのはあのケンタウロスの女騎士だつた。今ではサニーと共に騎士になる事で頭がいっぱいだつたが、根底にはソレがある。決意し、揺らがぬたつた一つの思いだつた。

だがそれを言つてどうなる？

寒いはずなのに、額から一筋の汗が流れ落ちた。

いや、だがここで落ちるわけにはいかない。妙な予感だが、次は無い気がするのだ。こと、自分に限つたことだが。

言えば少なくとも何らかの評価につながる。だが言わなければ何も残らない。

そう思い立つた瞬間には既に、ジャン・スティールの言葉は紡がれていた。

「ただの騎士に、新米に何ができるかわからない。だけどおれは、手助けになりたいんです」

この平和な世界で。

特に戦争もない、異人種が現れてから特に平穏になつたこの国で。「綺麗事を言つていいわけじゃないんです。ただ力があるなら助けて。誰を、じゃなくて、誰でも……困つている人を。助けを求める

ている人を！」

「……それがお前の正義か？」

「正義……？」

「騎士はいついかなる時でも、どんな場所でも悪に対抗し正義を守る。お前はその魂を守り通せるか？」

「はい！」

気がつけば、ドワーフの少女は微笑んでいた。  
また筆を走らせ、簡単に一言一言を記入する。が、やはりその位置からでは何を書いたのかは分からなかつた。

「では次の質問。義務教育は受けていたか？」

「はい。『ロンの街で受けました』

「なら読み書きは大丈夫だな。最後に何か質問は？」

「あー、その。お名前を伺つても？」

「構わないが、なぜわざわざそんな事を……」

「おれが騎士になつた時に、お世話になるかもしないんで」

彼女はふんと鼻を鳴らして、また記入する。

そこでペンを床に叩きつけるようにして彼女は立ち上がつた。机を軽々と飛び越えて、瞬く間に座るジャンの目の前へ。

「立て」

言われるがままに起立。すると、彼女はボディーチェックでもするように肩、腕、脇、など身体中に手を添わして検査する。

「座れ」

次いで、少しだけ自分より小さくなつたジャンの瞳を覗き込むようになつた。

蒼と、琥珀色の瞳。そして端正に整つた、幼さが残るといふか幼さ前回の顔。そして石鹼の香り。それが近づき、赤面し始める頃に彼女は離れた。

「異常はないな。視力も、普通よりはいいくらいだ」

「あ、ありがとうござります」

「体つきも割合にがつしつしてるし。どこかで鍛えてたのか？」

「え、ええまあ。炭鉱とか、鉱山とかで六年間働いてました」「ろ、六年！？ というと、十二からか？ すさまじいな……」

ほつほつと唸りながら、彼女は何度も彼の身体と顔とを見比べた。ジャンは何やら恥ずかしくなつて、頬が熱くなるのを感じながら、されどじつよつもないこの状況を甘んじた。

「それじゃあドーフはもう慣れっこか」

「まあ、すういお世話になりましたし」

「そりがそりが、いやー、立派だな。十八で、ねえ。……あー、そ

うか！ お前、あの時の少年か！ ボーアの時の！」

「はは、あの時はお世話になりました」

そうかそうかと、今度は力一杯両肩を叩き続ける。うれしそうに、もう身体検査や面接なんて忘れてしまつたよつに彼女の顔は、興奮やらなにやらで上氣していた。

この上なく嬉しそうに笑顔を作つて、まだ若者も捨てたもんぢやないと褒めちぎる。それから頭を驚掴みしてぐわんぐわんと振り回すと、今度はつかれたのか、机に腰をかけた。

小柄な身体は床から足を離し、ぶらぶらと振り子時計よろしく揺れる。

「あの時のみんなは結構褒めてたぞ？ 警ら兵だつてビビつてたのに良く立ち向かつたつて。ただコーリア……あのケンタウロスだけは『無謀だ』つて怒つてたけどな」

「いや、でも本当に褒められたもんぢやないですよ。ただ、その場の勢いで行つちやつただけですし」

「だがそうするにも勇気が要る。お前には、まずそれがあるつて事だけでも誇るべきだと思つ」

ぴょん、と机から飛び降りて、彼女は腰に手を当てる。騎士のボーズはこれが一般的なのかなと思つぼとに、騎士まゝいつやつていた。「ジャン・スティールと言つたな」

「はい」

「私はミキだ。検査は以上。最後のお前に配慮がないのは申し訳な

いが、このまま第一次試験に移行する。準備はいいか？「

名を名乗ってくれた。

それは一概には言い切れないが、騎士である彼女がこの青年を認めた。 そうとも取れるものであり、そして彼女自身はそういう意味合いで名前を教えていた。

この青年には期待できる。

そして、じつは若者こそ騎士にしてやらねばならぬとも思えていた。

それはとても平等じゃないし、私情を挟むというか完全に私情だが、恐らくこの調子ならば、普通にやつていれば合格するだらう。彼女はそうとも思っていた。

「はい！」

気持ちのいい返事を最後に、第一次試験は終了を告げた。

圧倒的だった。

「くつ、駄目だみんな退けッ！」

木剣を構える男が悲鳴のように仲間に命ずる。そして呼応するよう、彼らは出会って僅か一、二時間やそこいらであるのにもかかわらず、それだけで前に出ていた一人は地面を弾いて飛び退いた。コンビネーションはこれまで前に出た組よりも抜群だ。旧来の友と組んでいるような戦いぶりである。

しかしそれはあくまでも”素人”にしては、だ。  
鬼をして、それが通るはずがない。

「良い判断。六十点」

切迫する真っ赤な拳。燃えているわけではなく、血に濡れているわけでもない。肌の色素が濃密な緋色なのであり、そしてそれは腕のみならず全身がそうであつた。

そして強打。

志願者、その三人組のリーダーのみが装備する胸の青銅器は音を立てて粉々に砕け散つた。

失格。

これはそういう試験だった。

集まつた総数一　余名が一から四名のグループを作り、その中で一人のリーダーを決める。

決定した代表者は木剣を人数分、そして青銅器と、それを括りつける紐を担当試験官まで取りに行き、それぞれが装備する。

そしてそのグループは、いつぞやの鬼族の女騎士との戦闘が強いられた。

一太刀を入れる、あるいは五分間逃げ切れば志願者の勝利。試験

続行。

だが五分内でその青銅器を破壊された時点で無条件に受験資格が喪失する。つまりは落第だ。

あの身体検査、面接はこの戦闘を行つ際に著しく障害があるものを省く為のモノだったのだろう。今回は奇跡的、といつか当たり前にそれが居なかつただけだ。

この体力検査で”ふるい”にかける。

見ているだけでもよくわかるが、圧倒的過ぎる敵を前にして、逃げ出さずに五分間を守りぬく事は酷く困難だ。だから敢えて攻めに転ずる手段を選ばざるを得ないが、攻撃の隙を狙われて撃沈。

既に落第した十数組はみながそうだった。

そして体力が切れて戦闘を強制終了させられた者も多数。まだ十数組残つて居るが、指名は殆どランダムであるためにいつ呼ばれるか分からぬ。緊張が血流に乗つて、痛む下腹部が少しだけ気になつた。

「サニーちゃんが心配？」

無意識に零れるため息を聞いて、トロスが尋ねた。

サニーは今、珍しくジャンの隣に居ない。それは、仲良くなつたらしいリザードマンの娘が一人ぼっちだつたからだ。最初は四人組はどうか、という提案を彼女がしたのだが、

『人数が多くると逆に不利になる可能性が大きい』

『素人ならなおさらだ』

ジャンとリザードマンから出たその意見が見事に合致したために、今ではその右腕、右足に鱗と鉤爪を持つその娘『クロコ』とサニーが、そしてトロスとジャンがそれぞれ二人一組で組んでいた。

少し寂しい気もしたが、こうやって成長してそれぞれ自立するのが当たり前なのだと彼は思つ。

そしてまた、もし合格したらこれでサニーにも友だちができる。これは嬉しい限りではないか。

「心配だが、あのクロコつて娘。中々やるぞ、アレは」

「爬虫人はそもそも身体能力が高いらしいけど、それとは別に個人

の強さでつて事？」

「ああ。まず立ち振る舞いが経験者だ。据えた腰、歩き方。無駄のない修練されたそれだ」

さらに右半身が鱗で覆われている。鉤爪もあるところを見るに、攻撃の主体となる部分だ。そして青銅器の着用は原則的に右胸であり、代表者は彼女。ならば、いくら鬼としても手加減をしながら搔い潜るのはある程度の難易度を誇るだろう。

死ぬ氣で逃げれば、あるいは攻めれば五分はもつ。ジャンはそう評した。

もつとも、彼自身も素人だからあまり信ぴょう性のある評価とは言えないのだが。

「なら僕たちも負けてられないな」

「その通りだ。今はおれたちだからな」

気がつけば呼ばれていたとある一組。

トロスとの話に夢中になつていたが、そろそろ順番が来るだろうと思つて戦場と化すちょっとした空間に目を向ければ、そこにはまだ一人組が立つていた。

そして試験官の鬼も動きを止めていて……。

「五分経過。合格」

人間と鳥人の組み合わせ。その一人は暫くの間、言葉の意味を理解できていないような顔でそれぞれ見合わせていたが、実感が湧いた。そんな風に笑顔を作つて、両手を作る拳を空高く突き上げていた。

「や、やつたアツ！」

「あははは！ 良かつた……！」

腰が抜けそうになる鳥人の肩を抱いて、彼らは鬼が示す方向城内へと進んでいく。

まるで勢いがついたのか、あるいはコツを掴んだのか。単に彼女自身が見込みがある者には手心を加えているだけなのかもしない。

そこからの合格者は徐々に数を増して行つた。

だがそれまで十数組が続き、合格するのは約半数。城内へと向かつたのは三十人に満たない数である。

そして残るのはいよいよ、サニー組とジャン組。この二名で、「そこの女子二名。来い」

どうやら随分と運に見放されているようだと確信したのは、その時がきつかけだった。

「はい！」

サニーが木剣を手に提げて前に出る。クロコは手ぶらで、そして青銅器を付けずに出てきた。

何かがおかしい。その異変に気づいたときには既に、サニーの胸にはクロコが付けていると信じていたソレが装備されていた。ジャンがそれに何かを思つよりも早く、鬼は指を鳴らし、その剣やかな腕を腰に構えて敵を待つた。

「試験開始だ」

言つと同時にクロコが弾けた。

地面を蹴り飛ばし背後へと送る。まるで地面が高速で動いているかのように、滑るように鬼へと肉薄した。

腕をふるう。鉤爪が、空気を切り裂いて鬼へと迫つた。

顔面に襲いかかる爪を寸でで避ける。頭を下げれば、刃は虚空を切り裂いた。同時に彼女は体勢 자체を低くする。初めての先制攻撃に怯む間もなく、手馴れた様子でクロコの懷に潜り込んだ。

その直後に迫る膝先。鱗が逆巻く蹴りが鬼の腹部目掛けて撃ち上げられる。またもや顔面に吸い寄せられる攻撃は、さしもの鬼も予想出来なかつたようだ。

握った拳を解いて、前屈姿勢を無理やり崩す。大地に寝転がるようにしてやや仰向けると、水面に浮かぶような体勢で大地を蹴つた。

だが、その行動は”読まれて”いた。

クロコの陰で全力疾走し、命からがら背後に回り込んでいたサニ

一が木剣を構えて待ち構える。それに気づいたのは、既に無防備な腹に木剣が振り下ろされた瞬間だった。

「ていつ！」

ペチ、と木剣が触れる。

それからややあつてサニーの元を通過した鬼は背中を地面に擦りつけて停止した。

ただでさえ静かだつた空間が、より静寂になる。

落第組は愚痴ることをやめて彼女らの様子を伺い、息を殺した。そして鬼は何事もなかつたように立ち上がり、身につけている革の胸当てと腰巻についた汚れを軽く払う。彼女は簡単にそうして、やがて一人に対峙した。

「なるほど、作戦勝ち。合格！」  
「やつたー！」

嬉しそうにぴょんぴょんと跳ねるサニーを微笑ましく見守るクロ口は、それから促されるよりも早く彼女を城内へと誘つた。その最中に大きく手を振つてくるサニーにジャンは返してから　この上無く大きく息を吐いた。

随分とレベルの高い戦闘のような気がした。

いや、通してみれば相手の油断を誘つただけなのだ。だが、少なくとも鬼を止められるという、実力がなくても相手にそう思わせる態度を示したことが偉大だ。間違いなく強い。彼は認めた。

同時に　なぜよりもよつてあの組の後なんだと、嘆かざるを得なかつた。

あの、合格して当然だといつような態度。感慨もなく城内へと引つ込んでいった潔い、格好良く思える姿。

こちらは持ち前の体力で五分間逃げ続ける覚悟をしていたのに……決意が揺らぐ。

少しだけ試したくなつてきた。  
気持ちはいつでも前向きだ。

胸の青銅器を指先で触れながら、自分だけは攻撃を受けていない

と再認識しながらも。

だがここでとち狂うわけにはいかない。負けても勝っても評価につながるのならまだしも、負けた時点で落第だ。個人ならまだしも、トロスを巻き込んで。

許されない。

よし、逃げよう。

彼はそうやって自分を正当化してみせた。こればかりは得意なので、人知れず得意げな顔でトロスの肩を叩いて合図した。

「なりふり構わない。作戦通りだ。いいな、トロス」

「わかつてゐる。君ならそうしてくれるとthoughtた」

「落ちても恨みつこナシつてのはおれの言い訳だけど、それもいいか？」

「構わないさ。もうこの時点で運命共同体なんだから。姉さんにどうやられるだらうけど、もう心は決まってる」

「いいやつだなお前」

「私語は謹んで！ 最後、来い！」

ジャン・ステイールの体力検査は、また三 分ほどの間隔を開けてようやく開始した。

最後に回してくれたのは、おそらくミキなりの配慮のよつな気がしてならなかつた。

ともあれ、全てを見学できたのは良くも悪くも良い判断材料になつたのは確かだつたのだが。

前に走りだせば良い。

そう判断して動き出そつとしても、どうじてもあの鬼の機動力故に叩き潰される未来が見えていた。

なら後退するか。

そう考へても、トロスを打ち破つて投げて、彼もろとも吹き飛ばされる事態は簡単に予想できた。

自分にできる全てのことが、彼女には防がれてしまう。

彼女と同じ立場にたつて、彼はそれをようやく理解できた。

頭の中での作戦が瓦解していく。その音を耳にしたのはその瞬間の事だった。

体力に自信があつたはずだが、僅か一分足らずの時間で息が上がつていた。顎が上向く。空を仰ぐ。

そうなる理由は、慣れぬ環境で緊張したせいで動きに無駄が多くなるのが主である。

「ステイール！」

トロスの合図。ジャンは勢い良く横転して、頭上から降り注ぐ強烈な殴打を避けてみせる。受身をとつて流れるように立ち上がり、すぐさま走りだす。その後を追おうとする鬼の前に立ちふさがるのは勇敢なトロスだ。

「ふらふらと避けて、あんた、それでも騎士志願！？」

騎士になりたいから逃げるんだよ！

叫びたてもその余裕がない。口は今や、呼吸をするためだけの器官と化している。

そしてまた、彼女がそう声を荒げたのは初めてのことだった理由としては、ミキから随分と色好い評価を聞いたからだと思う。あるいは、あの上っ面の勇敢さを覚えてくれていたからだろうか。それは非常に嬉しいことだが、こと今回に限つては忘れていて欲しいところである。

「ステイール！」

「あい、よ！」

トロスの脇を抜けてジャンへと切迫。息も切れ切れで動きが鈍る。ジャンは振り返り、いよいよかと覚悟した。

木剣を構えて待つ。鬼は拳を振り上げ、流れのような軌道で滑るように彼の眼前、懷に潜るように深く踏み込んだ。

「逃げるなんてするから

振り下ろされる拳。そして触れる木剣の腹。それぞれが触れ合い、

軋んだ音を立てて、

「くつ！」

木剣は呆氣無く、悲鳴を上げて一つにへし折れた。が、拳は未だ勢いを持つて彼の胸元へと迫る。ジャンはその振り下ろされる拳に手を伸ばして、触れる。

掴む。

背を向ける。

彼女の足の間に踏み込み、伸ばされた腕を肩に乗せた。

体重が背中にかかる。女性特有の柔らかさは、残念なことに胸当てやらに遮られ、何よりも疲労と緊張と、半ば脊髄反射的な行動ゆえに感じる暇もなかつた。

少なくともジャンよりは筋力があるはずだと思つていた。身長は大体同じくらいだが、失礼な話少しだけ彼女のほうが重いと思つていた。が、それは幻想だ。

彼女の身体は簡単に持ち上がる。前屈すると肩に乗せられる腕を視点にして、くるりと一回転した。

身体は重力に則つて地面に吸い込まれるように叩きつけられる。背中を打ち、驚いたように目を見開きながら、肺の中の空氣を全て吐き出したようにむせ込んだ。

一太刀……ではなく一本。入れたには入れたが、カウントされるかは不明だ。

あまりに無防備すぎる体勢は衝撃故に身体を痛める。だから最後まで握つていた腕を自分に引きつけるようにしてふわりとした着地を促し、それはある程度成功した。

ジャンは腕を離して少し離れる。

彼女は驚いた顔のまま、トロスは意外そうな顔で後ろから、横に並んだ。

彼がしたのは柔術だ。倭国と呼ばれる極東の島国に伝わる徒手、あるいは短い武器を用いて攻防するさいの技法を中心とした武術だ。やがて鬼は立ち上がり、ぼそりと漏らすように呟いた。

「四分一秒……経過した時間は」

「はは、窮鼠猫を噛んだか」

トロスが冗談っぽく言った。

「火事場の馬鹿力でもあるな」

ジャンも冗談っぽく言った。

鬼は、どこか見直したような。だけどどこか怪訝そうな、疑うような目で彼へと手を差し伸ばした。

「合格だ。ジャン・ステイール。そしてトロス、だつたな」手を握り返す。視線を交わし、じつと田を見据える。真っ赤な肌に、その琥珀を埋め込んだかのような瞳は妙に綺麗だった。

「わたしはシイナ。今回の試験、合格することを祈る

「ありがとうございます」

深く頭を下げるとい、なにやら小さな笑い声が漏れるのを聞いた。顔を上げれば、微笑ましく微笑みを作るシイナの顔があった。

「このまま城に向かえば女中メイドが案内してくれる。日程としてはこれから昼食休憩後、それぞれ個人ごとに適性検査ね」

鈴が鳴るような声。穏やかに彼女は説明して、それからジャンらに背を向けた。

「わたしは落第生の相手をしてくるから、行ってなさい」

そうして、第二次試験は終了を告げ、束の間の休息が開始した。

昼食には広間のような場所があてがわれた。

巨人が出入り出来るほど大きな扉から中に入り、メイドに案内されるままに近場の部屋の中へと入る。その客間は数十人が入つてもまだ余裕があるくらいの広さを誇り、その中心には長机が鎮座する。その机には無数の料理が並んでいた。パンやスープから始まり、蒸し焼きにした肉をスライスしたものや、魚の丸焼き。サラダからデザートのプリン、ゼリー、ケーキ類など、まるでこれまでのご褒美のように滅多にお目にかかれないのである。

既に中で待機していた者たちは食事を開始しており、ジャンらも入室時にほんの少しだけアルコール分の入ったぶどう酒がメイド達から渡され、それを口に含んでから少しだけ肩を落とした。気が抜けた、というのが正確かもしれない。

他の志願者がわいわいと試験を忘れたように談笑し、料理に舌鼓を打つのを見ながらほっと息を吐いた。

トロスは既に料理を取りに行っている。対照的に、ジャンは壁に背中を預けるようにしばしの休憩をとつていた。

緊張ゆえの疲労だろうか。大して動いていないのに、妙に疲れてしまった。

サニーもクロコと楽しそうだし、トロスは料理に夢中だ。これで昼食休憩時間分はゆっくり休めるだろう。

「食事はお気に召しませんでしたか？」

リラックスできるようにぶどう酒を渡したのだろう。彼はそれで喉を潤していると、不意に声がかかる。扉付近で待機していたメイドの一人だった。

普通の人間だ。動きにくそうなエプロンドレスを着て、頭には白いレースがついたカチューシャを身につけている。長い黒髪が特徴的な、東洋系の女性だった。

「ああ、いやそんな事はないですよ。ただ緊張と疲れで、喉に通らないなくて」

「それでは他に食べやすいものを用意いたします」

彼女はそう言つて丁寧に頭を下げる。背に向かふひしゆるメイドを、ジャンは慌てて引き止めた。

「ちよ、ちよっと… 結構ですよ、結構です。わざわざそんな… メイドは振り返る。努めて無表情で、それでも、と食い下がるようになに言葉を返した。

「第一次試験合格者である皆様方には一時間後に控える最終試験に備えてリラックスしてもらわなければなりません。私たちはさうするための仕事を命ぜられていますので… その、困ります」

言葉が続かないのか、思いつかないのか。彼より歳上であるどう彼女は気まずそうにやや俯いてそう告げる。メイドなりの世話焼き根性かと思っていたが、ビタやら皆が何かを口にしないこと怒られるらしい。気難しい職業だとジャンは思つ。

究極的にはリラックスしていれば良このだろつが、そこへんはさじ加減だ。

ともあれ、何かを食べなければ彼女らの迷惑になつてしまつてしまい。そこまでして拒否をする理由があるはずもないジャンは、苦笑して頷いた。

「わかりました。手を煩わせたようすみません」

「いえ、じちらじら… もしよろしければ料理をお持ちします。何がお好みでしょうか?」

両手を前に組み控えめな態度な彼女は、妙に親切にそう言つてくられた。

それは嬉しい提案だったが、ジャンは資金を持ちあわせては居ない。チップを要求されても無い袖は振れないものだ。

「あ、いや。そのくらいは自分でするんで。ありがとうございます やんわりと拒否してみると、メイドはそこはかとなく残念そうな顔をした。一体なんなのだろうかと思つながら会釈をして、背を向

ける。目指すは長机だ。

まず空の皿とフォークを取る。ひとまずパンを一つ捨い、それから適当に、彩色を気にしながら、バランスを考慮しながら、サラダ、肉、魚を一通り摘む。青年の昼食にしてはいささか量は少なめだったが、ただでさえ食欲が無いのだから十分だろう。

周囲は依然と歓談を続けている。トロスは遠征して遠いところの料理を漁つていて、やはりサニーはクロコとのおしゃべりに夢中だ。寂しい気もする。だがどこか解放的な、清々しい気分になる。

一人は新鮮だ。

たまには良いだろう。

サニーは既に魔法を自覚しているから合格は確実だし、クロコ、トロスは分からぬが……なるようにならぬ。それは自分だつて同じだ。

定位置にしつつある壁際に戻つて、彼はまずサラダを口に運んだ。グラスは指に挟んで床に対しても水平になつていて空だから問題はない。

「んー、まんま野菜だな」

自然の味だ。草というわけではないが、ドレッシングをかけなければ特別旨いというわけではない。ドレッシングをかけ忘れたが、わざわざ机まで戻るのは面倒だ。彼はサラダを食べきり、魚を口にする。

好きな食べ物は最後に残す主義である。が、その魚は思いの外美味かつた。程よい塩加減。脂が乗り、疲れた身体に染み込むような味だ。癒される。活力が与えられるようだ。

こちらを残せばよかつたと思う。最後に口にした肉は、味の濃いものの後だつたせいか、妙に薄味に感じた。ハムよりは歯ごたえがあるが、それだけだ。

「（）馳走だったな……」

一通り食べてみた総評は、まあ美味かつた、である。

炭鉱や鉱山での食事はパンや、ウサギや蛇の肉が主だったから牛

は新鮮だつたし、中々食べられるものじゃなかつた。野菜だつて同じだ。魚も。

この街にきても、騎士になるまで資金が幾ら必要なかわからなから散財は出来無いという理由で、食費は真っ先に削られた。それでもサーーが不服を言わない程度には材料を揃えたし、調味料だつて適度に購入した。が、毎日肉を食べられるわけじゃないし、買いたい物を頻繁にするわけにもいかないから生鮮食品はそもそもあまりなかつた。

もつとも、それでも無いなりに食材は買いたしたから、ただこの城での食事は中々お目にかかる手の込んだものばかりだ、という評価につながる。

だからどうというわけでもないのだが。

ただぶどう酒だけは気に入つたから、できれば愛飲したいものだつた。

それから暫くの時間が経過した。

まつたりとする雰囲気。

些細なアルコールが回つたせいか、周囲の朗らかさに溶けこむようじヤンは微笑を作る。気分が良かつた。

「お気に召しましたか？」

先ほどのメイドが近づいた。

嬉しそうな笑顔でそう訊いた。

「はい。中々食べられないものばかりで、とても美味しかつたです

」

他の機会であればもつと堪能できたことだらう。スープに、シチューやらにやう。まだ食べてみたいものはたくさんあるが、どうにも食指が伸びない。食べる気力がないのだ。

下手に食べ過ぎて、適性検査で不備が出るという可能性を無自覚に心配しているのもしれない。ともあれ、こういった立食パーティーのような経験は雰囲気だけでも味わえて良かつたというものだ。

「それは良かったです」

彼女はやはり笑顔で頷いた。可愛らしい、まだあどけなさが残る少女らしい顔だ。歳上かと思っていたが、もしかすると同年代かもしれない。もしさうなら、その歳でメイドなんて立派なものだとジャンは思う。

「ジャン・スティール様、でよろしかったでしょうか？」

胸の前で指を絡めるように手を握る。百面相と言つべきか、表情豊かなメイドは、今度は少し不安気に眉尻を下げていた。

「ああ、はい。そうですけど……」

「最終試験、開始致します」

軽く頭を下げて彼女は背を向ける。その最中に無表情に戻る彼女は、その後一言も口にせずに歩き出した。その背中で、ついてこいと言わんとしていることば、さしものジャンにもすぐに分かつた。

最後尾が一度あつた。しかし最後の最後で、一番最初とはどういふ了見なのだろうか。

おそらく適性検査は最初の面接のよつな形で行われる。そして面接に限るものではないが、試験の順番で最初の人間とこいのは、判断基準にされる事が多いのだ。

最も大切なうと思われる最終試験での順番が、最も避けたかった最初であるのは、今回彼にとつて良いのか悪いのか、正直良くわからなかつた。

広い廊下を歩き、やがて玄関のフロアにやつてくる。巨大な扉から真っ直ぐ続く紅い絨毯は、王座の間に続く道だ。

そしてメイドは、その上を歩き始めた。

左右の壁には扉はなく、向かう先は王座の間。

ジャンの緊張が瞬く間に高まつたのは、言つまでもないだらう。

そして思い出す。この試験は、ただの騎士団養成学校入試試験ではないことを。

”王立”騎士団だ。王が、この国が支援し創りだした組織である。ならば責任者は王であることは明白。

その面接官に王がわざわざ出向き、それぞれ品定めをするのは当然の権利である。それを予想はおるか、考えもしなかつたのが不思議なことだった。

やがて、自分より一回りも一回りも大きな両開きの、立派な装飾がなされる扉が行く手を遮った。

「こちらの準備は整つております。扉は『自分でお開け下さい』手を前で組んで、扉の脇に彼女は立つ。おそれらしく、一番初めに彼が試験を受けることを知つていたからわざわざ親切にしてくれたのだろう。ありがたい心遣いだ。

「ありがとうございます」

「『健闘をお祈りします』

「……はー」

緊張を隠せず、表情を強張らせた。あの昼休憩で緊張しつぱなしだったら、確実に頬の筋肉がこむら返りしていただろう。

「コンコン。

ノックをしてみる。

『どうぞ』

男の声が返事をした。

ドアノブを捻り、扉を押し開ける。

彼は重いソレが作りだす隙間に身体を滑り込ませるよじじして、中へ侵入した。

「失礼します！」

荒げるよう挨拶をする。深く頭を下げ、顔を上げる。

紅い絨毯は長く続く。中に入ったといふのに、王座は数メートル先の段差の、さらに先にあつた。

先ほどの客間よりも遙かに広い空間、その王座の奥の壁には龍の装飾がしてあつた。金でそれを形作る、見栄の権化であるよつだ。が、城なのだから当たり前だ。一国の王が住まう城をわざわざみすぼらしく飾るわけがない。

この豪華絢爛が唯一許されるのが、この城とくものだ。

そしてその空間は、一言で言えば莊厳だった。

一言で言えば、すくなく莊嚴だ。

ジャンは歩き出し、段を上がつて王の前へ。

一つある王座の内、その一つだけが埋まっている。白髪頭に冠を乗せた、白い鬚を蓄える老人。『レヒト・アレス国王』その人だ。王座のやや手前には、長槍ではなく剣を装備する甲冑姿の男が両脇に一人づつ並んで待機している。

ジャンは、王座の数歩手前で立ち止まり、片膝をついて頭を下げた。

「今日は下賤な民の為、騎士を志す我らの為に時間を割いていただき、大変光榮に存じます」

あまりに打算的すぎただろうか。

だが一番最初といつもあるし、代表として挨拶をして置くのは常識だろう。

それとも言葉が何か間違っていたのだらつか……返答の無い挨拶に、ジャンは不安になってくる。

恐る恐る下げる頭を上げてみる。

王は肘置きに肘を立てて、頬杖をついていた。

目が閉じていた。

王は寝ていた。

「……！」

そうか、試しているのか。

ジャンは直感的にそう考える。

コレをどう凌ぐか、王はその見事な回答を望んでいる。

そういつた思考に落ち着いた刹那に、王の頭は頬を穿つ拳から落ちた。

肩がビクリと跳ねて、何が起こったのか理解できていよいよ眼で周囲を伺う。ソレに倣つて、近衛兵は視線をジャンに向けてやる。

「よ、よく来た、少年よ

そして、寝起きのよくなしやがれた声が彼によく返される。ジャンは心のなかで深く嘆息した。

この国はこれで大丈夫だろうか。

「ふむ、ジャン・スティールだな。話は聞いている。先日、我が騎士団が駆け付けるまで襲撃犯を抑えてくれていたとかなんとか」「ああ、いえ。滅相もないです。ただ調子に乗つてやつたことなので……」

「勇敢な行いには変わりがない。基本的な心理検査、動機は既に聞かれているだろうし、貴公も疲れているだろう。手短に終わらせる」「……はい」

思ったよりも適当なのか。あるいは思いやりあふれる行動なのだろうか。

少なくとも今のところ、王の威厳といつものはない。いや、確かににあることはあるのだが、いかにも王で、逆らえばもう命はないといぐらに厳格な人を想像していた彼にとって、その存在はあまりにも親しみ易すぎた。

もつとも、外交の面を考えればその方が都合がいいのだろう。國內での信頼度もそうだ。

「十八歳以上で、読み書きができる、心身共に健康。募集要項にはその他に何が記してあつたか覚えているか?」「

「特殊技能の有無……つまり魔法を扱えるか、否か。ということです」

「うむ、そのとおりだな。基本的に、魔法が使えるか使えないかは先天的なものだ。そしてまた、使える者でも力の存在に気づいていない者も多い……ただ魔法があつても単純な肉体面やその他が未熟であつた場合は我が騎士団を諦めてもらいたい所存だ」

「はい」

「貴公がここに居るということは、全ての試験をクリアしたということだ。騎士を目指すに値する、その最低限の位置には立てていると いう事だ」

だが一番の問題は、ここからなのだ。

「そして貴公が魔法を扱えれば……その素質があればめでたく、騎士養成学校への入学が許可される。余談だが、学校生活の一年間で魔法が扱えなければ残念ながら騎士にはなれない。最大で二年の留学生が許可され、それを超えた時点で退学処分だ。入学するには、また春の試験を受けなければならぬ」

「……はい」

王が近衛兵に田配せをする。

先ほどどの、寝起きのどこか間の抜けた姿はどこへやら、王たる尊厳は果たして保たれている。

合図された近衛兵は跪ぐジャンの隣に移動し、屈むようにしてジャンに声を掛けた。

「君、これを」

手渡されるのは、白っぽい石だ。石英のようだが、それにしては妙に白すぎる、氷のような石。

手触りは滑るようであり、感触は加工された水晶そのもの。だが自然な、どこか無骨な丸さを見るに加工はされていないはずだ。

そしてジャンは、その石を知っている。

昔みたからといつものではなく、仕事で扱っていたからだ。

とある一つの鉱山。特殊な道具を作る場合にのみ用いられる、特殊な鉱物。

魔石と呼ばれるのは、ちょうど彼が手の中で確認しているそこの石だった。

色彩は無数にある。環境によつて色が異なり、魔石がもつ特徴も色ごとに変わる。

魔石というのは、魔力という不思議な力をもつ石の事だ。古くからある、希少ながらも様々な装飾や道具、あるいは武器に加工して使われている汎用性の高い鉱物。それが使用された道具は全て特殊な効果、効能を持つようになる。

本来肉体に紋様を刻まねば使用できない魔術を、道具に刻むこと

で”一部”を利用できたり、またそういう魔術の効果を持つように魔石を加工し、ただ身につけるだけで身体能力が強化されるなど。単なるお守りとして使われることが多い鉱物だ。

そしてこの白い魔石の特徴は、魔力伝達に過敏であること。

魔術は妖精の力を利用して行われると言われている。

一人が一つだけ持つ魔法は、その魔力といつものを利用して行われると言われている。

そうなれば、魔法が使える者は魔力を持つのだ。

となれば、その魔力に、魔石が反応する。無意識でも潜在的にそれを持つのならば、石は必ず反応する……それを渡された時点で、ジャンはそれを理解した。

「石が反応した場合、その色によって魔法の傾向を掴むことが出来る。例えば赤なら炎、熱、青なら水、氷雪……白なら光、あるいは大気を……なのだ、が……」

アレスは明らかに困惑していた。

また、周囲の近衛兵も毎年の光景をいつものように見守っていたのだろうが、ジャンは思わず漏れたのだろう困惑の唸り声を聞き逃さなかつた。

そして彼自身も、少しばかり困っていた。

石は輝いている。

この時点で合格は決定した。

それは嬉しいし、今にも両手を突き上げて喜びたいくらいなのだ。色なんて、魔法の傾向なんて正直などいふ、どうでもよかつたのだが……。

「透明の輝きとは……前例に無いな……」

アレスが唸る。

そう、石は透明に輝いている。意味が分からぬだろうが、そのままの意味だ。ジャンだって意味が分からぬ。

ただ、透明だと判断できた理由は　この白い石が白く輝けば眩く直視できないだろうが、今はただ”明るくなっている”としか説

明できない所にある。濁つたような白い魔石が、存在感を示したようになる、たつたそれだけの反応。

輝いていることには間違ひのないのだろうが……。

「ふむ、面白いな。完全なる未知、何者にも、これまでの全てに染まらぬ新しい力というワケだ。だが例外的イレギュラーである分、使いこなすことはもちろん、己がどのような魔法を持つているのか自覚することすら難しいだろう」

アレスは、嬉しそうに口角を釣り上げて、眼を細めて、頬を上げて、顎鬚を撫でた。

それから、周りには近衛兵しか居ないと云うのに、声を少しだけ小さくして、

「貴公の学校生活、その成績や評価によつて考慮しよう。貴公には、何か特別な力がある。そんな気がするのだ」

異人種がこの世界に現れてから生まれた、魔法という力。その時はそんな考えられもしない、ありえない特殊な力に多くの人間が目を白黒させ、あこがれ、称えた。

そして一五年が経過した今、その力は希少ながらもじく常識的に存在している。

ジャン・スティールはその中で唯一生まれた、魔法の中でも異例的なものである。より異人種に理解があり知識がある王がそう評した。

お墨付きだ。

誇るべきか、戸惑うべきか。少しだけ困った後、ジャンはまた深く頭を下げた。

「ありがとうございます……ですが、大丈夫です。おれはこの魔法を使いこなし、必ずやこの國の為に尽力致します」

つまりは魔法を使いこなせなければ國のために働けないということだ。

従来通り、魔法を覚えるまで卒業できないという宣言である。少し遠まわしだったような気がしながらも顔を上げると、それに

応するようにアレスは頷いた。

「相分かつた。貴公の言つとおりにじよつ立て。

アレスはそう言つと同時に、自分自身も椅子から立ち上がる。ジャンは促されるままに前に進み、やがて彼の目の前へ。国王の、畏れ多くもすぐ眼前へ。

「今日から七日後、試験と同じ時刻に城へ来るが良い。入学式を開催する。制服や教科書は三日以内に合格者の住所に配達しておく。服装は制服だ。荷物は特にない」

王が手を差し出す。ジャンは石を持ち替えて、それに応じた。がつしりとした老人の、シワだらけの手が彼を包み込む。力強い握手を交わし、それから彼はまた椅子に腰を掛けた。

「活躍を期待しておくぞ、ジャン・ステイール」

「あ……ありがとうござりますっ……」

この言葉は、あの握手は、一国民としては異例なほどに光榮で、名誉なことのように思つ。國といつもの、王という存在をあまり知らない彼でさえそう思うのだから、それはそれは凄まじい状況なのだろう。

彼はそう深く頭を下げてから、振り返る。近衛兵に魔石を返して会釈をしてから、扉へ。

また王へと向いて、

「失礼致しました」

そう挨拶をして、彼は王座の間を辞した。

「おめでとうございます、ステイール様」

帰りを待つていたメイドは恭しくそう言った。

のぞき見でもしていたのか、あるいはその雰囲氣で察して賭けに出たのか。

なにわともあれ自分のことのように微笑むその表情を営業スマイルだとは思えないのは、自分が純粋なお陰なのだろうかと彼は思つ。

呆気なかつた。

思い返せばそうだつた。

石は簡単に光るし、体力試験だつてなんとか凌いだ。身体検査は論外だ。

それにそもそも、合格したという実感が、全く持つてないのである。眠る頃になれば実感も否応無しで湧くのだろうが、それまではなんだか勘違いしているような気分で、複雑だ。

「ありがとうございます。あのぶどう酒でリラックスできたお陰ですよ」

「あ、いえ……そんな事はいりません。スティール様の持たれる実力が全てです」

そんな言葉は不意打ちだつたのだろうか。彼女は少し言葉につまり、少しだけジャンから視線を逸らしてそう返す。

「そういえば、メイドさんつて騎士団の世話もするんですか？」

少し余裕が生まれた。

だから調子に乗つて訊いてみた。

彼女は少し驚いたような顔でジャンを見てから、やがて紅い絨毯を引き返すように歩き出す。彼はその後に続こうとするが、それを見た彼女は歩調を緩めて隣に並んだ。

「そうですね。基本的に騎士団の皆様も敷地内の寮で過ぐされているので。私は城内の清掃係なので、あまりお会いする機会はないのですが……」

メイドにも役割というものがある。例えば清掃係でも、どこからどこまでの範囲を。配膳係や、買い出し係、王、后、姫の世話係など。庭の手入れには庭師がいるし、厨房には料理人が居る。それでもメイドの負担は割合に大きいといふらしい。

「はは、じゃあ騎士になった時はよろしくお願ひしますね」  
この城に勤めているのならば、少なくとも今よりは会う機会は多くなるだろう。

冗談っぽく、だがその本心をさらけ出して言つてみると、今度は

吹き出すのを抑えるように口元を抑えた。

「自信家なんですね」

「まあ、そうですかね。でもおれはどのみち、騎士以外には興味ありませんから」

騎士になる。今までそれしか見て来なかつた。だが今でもそれしか見ていない。

これで学校を無事卒業出来なかつたとしても、また入試を受けて、入学して……繰り返すだけだ。

「メリイです」

「……はい?」

「私の名前。騎士になつたらよひじくお願ひします、ですかね?」

「ああ」

手を、ぽんと打つ。

唐突だつたが、どうやら仲良くなってくれるらしい。

これまで友達の居なかつた彼にとつては嬉しい限りである。

「ジャンです。ジャン・スタイル」

「知つてます」

うふふ、と笑う。可愛らしい少女だとつくづく思つ。

サニーにあるようでない穏やかな雰囲気を纏う女の子だ。エプロンドレスが良く似合つメイドさんだ。

女騎士たちが持つクールビューティなものとは大きく違つ、それは別の魅力。

新鮮だった。

この街に来てから、多くのものにそう感じていた。

「それでは、スタイル様はここでお別れです」

玄関の扉の前で止まるど、彼女は平然と言つ。惜しくも、寂しそうでもない。いつでも会えるから大丈夫だと言つよつた風体で、扉へと促した。

「お友達なら、庭園でお待ちください」

メリイはそう言って軽く手を振つた。

ジャンも振り返し、扉に向かう。

彼女はまたこういつた往復を繰り返すのだろう。やはりメイドといふ仕事は忙しそうだ。

そう思いながら、扉を開ける。軋んだ音を立てて、中へと漏れる、彼を照らす光の隙間が徐々に開いてくる。

外に出た。

眩い陽光が、突き刺さるようにジャンへと襲いかかって。

彼は、天高く両手を突き上げる。

「よっしゃ！」

小さな勝利感。

全てはここから始まるはずなのだ。

だが、この合格を、じわりじわりと心の奥から染み出し始める実感を、彼は感じずに居られなかつた。

最終試験を合格に納めて、ジャン・スティールの入試試験は終了した。

## 順応の日々

新しい環境での一週間とは、ドギマギと緊張に馳り回らしく無くもぎくしゃくしながら過る」していれば、気がつけば過ぎてこるという、長いようで短く感じるあつというまの期間である。

そしてまた、新しい人間関係が概ね構成し始める一週間でもあった。

「おひはー」「おはよ」「びつよ、昨日の」「あ、あれメチャいいわ

なんて、相手の出方を探り合いつつも親睦を深め合へ、ビニードもあるような若者の会話が交錯する。

登校する道。往来には、妙に堅苦しい白い制服を着る男女が歩いていた。

学校は城の南東、約一キロほどの距離にあり、学生寮は城と学校の通過点にある。だから、そんな楽しげに笑いあう彼らの様子は嫌でも目に入り耳に届いた。

憂鬱ではない。

むしろ微笑ましかつた。

彼も皆と同様に制服をまとい、肩にかけるショルダーバッグには今日行われる授業日程に合せられた教科書、そしてサーー特製の弁当が入っている。どれもコレも、今所持しているもの全ては学校から購入したものだ。

サーーとあわせて、まさか資産の三分の一が吹っ飛ぶとは思わなかつた。

「ねージャン? 今日のおべんとは頑張ったからおいしいよ?」

不景気な表情を見たのだる「サーーは、心配そうに顔を覗き込んでそう言つた。

ジャンは笑顔で頷く。

「ああ、ありがとう。サーーの弁当はいつも美味しくて助かるよ

買いだめした米がだいぶ残っているのが不幸中の幸いだった。

寮は家賃も無く、水も使い放題。台所もトイレ、浴場は全て共同だし、男子女子で分かれているが、少しでも出費を抑えたい彼らにとつてはそれだけでも上等だ。

そして寮生は、一年生三十人のうち、大体半数ほどがそうだった。ちなみに学年は二クラスに分かれていって、十五人ずつ。奇跡的にサニー、トロス、そしてクロコともクラスは一緒になっていた。

そしてクラスでも、挨拶するだけの者から日常会話を交わす者が多くでき、立ち位置も整ってきた。

全てが順調に来ている。

少しだけ問題なのは、クラスの半数以上が 異人種という事である。

そしてそういうた關係で微妙なギクシャクがあるのは、多くが城下町ではなく、その支配下、支援下にある多くの街や村出身の者が多いからだろう。簡単にいえば、慣れていないのだ。

加えて純粹に異人種に好意を持つている人間も少ない。憧れすら抱いているジヤンは、その中では珍しい方だった。

「よつ、ステイール！」

「サニー、ステイールくん おはよ！」

クマのように毛深く、ライオンのタテガミのような髪型の男が背中を叩き、その後ろからやつてきた昆虫の羽根や、蜂のような触覚と腹を持つ女子生徒らが追い抜いていく。

「ああ、おはようみんな」

そうしてわざとらしい早歩きを、されど勘付かれぬようにクロコはサニーの隣にやつってきた。

「あ、クロちゃんおはよっ！」

サニーは親しく挨拶する。クロコもそれに笑顔で応対した。

物々しい右半身を持ち、また見た目相応にクールな彼女はあまり感情を表に出さない。さらに口数も少ないから少し心配だったが、サニーには心をひらいているようだ。

やはり同じクラスに居るのだから、誰かが苦痛を感じる環境を作りたくないと思っていたから、これはいい傾向に思えた。  
彼がそう、人知れず満足気に頷くと、

「うん、おはよう。一日の休みがあつたけど、ステイールになことされなかつた?」

思わず吹き出した。

「な、ど、どうこいつ意味だよ…」

「そのままの意味だ、色魔が」

「クロちゃん、ジャンはそんな事しないよ? 優しいけど、家事は全然できないから私無しじゃ生きてけない身体なだけで」

「お前が元凶か!」

なぜ大して接していないクロコにこんな妙に傷つく誤解を受けなければならぬのかと思っていたが、その誤解をもたらす元凶は身近に居た。

思わずその尖る耳を引っ張ると、

「いたたたたつ!」

涙目になつて必死に抵抗する。振り回す腕はかくしてジャンの下腕に鋭いチョップをかまして、手を離すと同時にクロコがサニーの頭を優しく撫でた。

「サニー大丈夫?」

心配気に彼女を見守る一方で、キッとジャンを睨み返す。

ジャンはさらに何か返そうと思ったが 外壁に囲まれた校舎、その柵のような門が見えてきた。もう無理だと肩を落とし、彼は為すがままで校舎へ、そして教室へと向かつた。

校舎は三階建てで、一階部分は食堂や保健室、職員室などがある。二階部分は一年教室が、そして三階部分には一年教室が並ぶ。規模的にはそう大きくも広くもないこの校舎で一日の大半を過ごすことになる。

まず校舎の昇降口から外に出れば、広大な空間がある。授業時間

中は閉ざされる門が見えるそこは屋外訓練場であり、肉体訓練や模擬戦闘などの授業は主にここで行われていた。

さらに校舎から伸びる渡り廊下から向かえるのは、校舎顔負けの大きな図書館と、その近くには人工的な水たまりがある。正方形に大地を繰り抜いたようなそこは『プール』であり、夏場はここで訓練もするといふ。

そういう具合に、施設は充実していた。

総数百人にも満たぬ養成学校、訓練学校とも呼ばれるここで、およそ十人前後の騎士が毎年生まれているらしい。大半の者は卒業出来なかつたり、あるいは過酷さに堪え切れずに自ら騎士への道を辞退するからだといふ。

「どうか……じゃあ今週から本格的に感じだらうな」

食堂で集まつて食事を終えた後、それぞれ自然的に解散となる。サーーとクローフは教室に戻つて周囲を巻き込んで和気あいあいとお喋りをしている。ジャンは絨毯が敷き詰められている廊下で、校庭が見える窓に身を乗り出すようにしながら、トロスと談笑していた。「多分ね。スティールなら大丈夫だと思つけどね。姉さんもそう言つてたし」

授業内容は、教育というものから六年も離れていた彼にとっては退屈以外の何者でもなかつた。

ただ座つて、話を聞く。数式を解く、数学という授業もただ延々と公式を覚えるまで似たような問題を解かされるのだ。さらに状況訓練という授業では、あらゆる作戦下で、どのような不測の事態が起こるか、誘発されるか、そこでどのように行動するのがもつとも適切なのか。そういう事学ぶ。

武具の扱いもまずは机上で習つし、騎馬だつてそうだ。  
まずは理屈からという考え方だ。

だが、そのやり方はジャンに良く合つていた。実際にやつてみるとあたつて、モノがどういった原理でどう動くのか。武器はどういった事を目的に、どう使われるべきなのか。そういう事を理解し

た上で行うのが一番効率がいい。何よりも身体の負担にならない。

そんな事を考えていると、不意に後ろから気配が迫った。

「ステイールくん、トロスくん。何してるの？」

振り向くと、チョロリと細く長い舌を覗かせた女子生徒が立っていた。深い青色の髪を持ち、それを薄めたような水色の宝石が如く綺麗な水色の瞳の女性だ。上着をしっかりと身に付けて居るもの、その引き締まる腹部が、へそがあらわになる。

そして彼女はスカートも、ショーツも着ていなかった。

「ああ、委員長」

言葉に、彼女のすぐ後ろでどぐろを巻く尾がちらちらと反応した。

そう、彼女の下半身は蛇である。

彼女は蛇族の少女だった。名前は『レイミィ』。これから学校生活でクラスの代表となる立場にわざわざ立候補した、立派な女の子だ。

「おれは今何もしていないんだよ」「

「へえ、よくわかんないけど」

「まあ普通にトロスと話してるだけだしね。レイミィは？」

「あたし？ そうねえ、貴方に話しかけたってところかなてへ、とわざとらしく舌を出す。

打算的な行動だと彼は思う。

「レイミィは学校に慣れた？ 結構、周りの女の子たちと話してみたいだけだ」「

「うん、まあね。ただちょっとね、ヒトの男の子が怖いかなヒトが怖い。」

それは、これまでの経験や聞いた話でよくあるパターンだ。

異人種は人間の多い場所に好んで住み着く。といつても勝手に居住を構える訳ではなく、移民として普通に転居するように街に済むのだ。そして閉鎖的な場所であればあるほどに外からの人間は珍しく、それが異人種となれば珍しいどころの話ではなくなるだろう。

そして幼い子供ならばなおさら、異人種に対する態度は顕著になる。子供といふものは、自分とは違う場所を指摘し弄りたがる生き物だ。

そのあと出来事は想像に難くない。

一言で言つてしまえば、いじめに遭うのだ。そしてそいつた環境にあつた異人種はそう少くはない、といつのがこれまで聞いてきた話である。

全てが全て、この国内、城下町内のようにうまくいく話ではない。残念な話だが、一五年が経過した今でも、異人種の存在が常識的になつても尚、それが受け入れられる環境は決して多いとは言えないものだった。

「やつぱり慣れかな。でもおれもそのヒトなんだけど？」

「あー、なんかステイールくんて、あんまりそういうの関係無いつて感じるの。良くわかんないけど、ステイールくんつて異人種でも普通の人間みたいに接してくれるでしょ？ ちょっとの動搖も氣後れもなしに。ただちょっと、ぼーっと」つち見てくることはあるけど

「それは見とれてるだけだよ。だつてすこいよ、魅力的つていうかね。おれたちに無いものを持つてるから羨ましいっていうか。もつと仲良くなりたいかな」

「ステイールって女好きだよね」

「あ、トロスくんもそう思う？ しかもなんか手馴れてる感じしない？」

「分かる、日常的になつてるんじゃないかな」

気がつけばそういう話に移行する。

まだ一週間しか経過していないのにそんな不名誉な称号はいただけないものだ。

ジャンはそれらの声を飲み込む程大きな声を荒げるように、話を転換した。

「あ！ ああ、そういえばわ この校舎の地下つて知つてる？」

そしてまた、不意を突くようなその質問に、それぞれが疑問符を浮かべるよう、彼を注視した。

「地下？ なにそれ」

「僕も知らない」

うまい具合に興味を逸らせたようだと、ジャンは胸をなでおろす。安堵の息を吐きながら新鮮な空気を吸い込み、勿体ぶらせるように説明を開始した。

「なんでも地下には、『呪い』が封印されてるらしいんだよ

「呪い？」

「なにそれ」

「まあ、超ヤバめの魔術みたいなもんかな。それが具現化して、ヒトの形で暴走したんだって。それを地下の一室に封印したとかなんとかって話」

この話の出自はシイナ。あの鬼族の女騎士である。

聞いたのは、入学式であり、そこで挨拶をした際だった。なんでもためでたい日に幸先の悪い話を聞かせるんだと思っていたが、まさかこんな所で役立つとは思わなかつた。

今では感謝感激雨あられだ。

「へえ、異人種じやないんだ？」

「みたいよ。権化そのものって感じかな」

細かいところはよく知らない。聞いた話だからだ。

だからそこらあたりは全てジャンのさじ加減、イメージで語る。どのみち縁のない話だから、どこまで飛躍してしまっても関係無いだろう。

「でも地下って入り口ないわよね？」

「絨毯で隠してあるんじゃない？」

「あー、それじゃあ搜索は無理ね」

と、レイミィは残念そうに肩を落とした。どぐろを巻く尾もそこはかとなく元気がなさそうだ。

「いや、一応委員長なんだから、むしろ止めようよ~」

「委員長なんだから、危険かもしれない場所を確かめておいて、そこから対策を立てるべきだと思わない？」

もつともらしく言つてきた。

たしか委員長に立候補した時も、他に誰も対抗馬が居なかつたのにもかかわらず妙に説得力のある言葉でまくしてていたな、とジャンは思い出す。

頼もしいと感じられるが、突つ込みどじろはいくつか隙間を開けるようにある。警戒すべきか否か、迷つてしまつ点だ。

「さすがレイミィ、頼もしい」

ひとまずスルーしておくに越したことはない。

彼女もその返答を流すようにうなづいてから、また改めてジャンを見据えた。

「そろそろ授業始まるわ。遅刻しないように教室に戻りなさいね」「ああ、ありがと」

と言つて、彼女はうねうねと尾をうねらせながら滑らかに前進。割合に速い速度で教室の中へと戻つていった。

順調だ。

ジャンは改めてそう思つ。

人間関係も良好。憧れの異人種も身近に多いし、授業にも追いつける。

だが同時に、ここまで都合よく進むことに不安を覚えた。

また何かあるのではないか。直感的にそう思つ。

ジャンはまた窓の外へと身体を向けて、空を仰ぐ。晴れ渡る青空は、いつ見ても心が澄むようで、少し気が紛れた。

「気のせいなら、いいんだがな……」

それからややあつて、授業開始の鐘の音が鳴り響いた。

## 春季の疾風

その日の放課後。

春の陽気に誘われて眠りこけていれば、授業が終わつた頃に目が覚めた。

「おー、じゃーなステイール」

「まったくね、スティールくん」

可笑しそうに笑いながら、獣人、虫族、植物族は挨拶をして去つていく。やがてただでさえ少ないクラスの中には、その半数程度しか生徒が残つていなかつた。

ジャンも、特に慌てるようではないが、カバンに教科書を詰め込み帰宅の準備を開始する。

「ねえジャン、私たちこれからちょっと遊びに行くんだけど、ジャンも行く？」

と声を掛けたのはサニーだが、振り返ればクロコを含む女子一人が群れをなして彼女の背後にたむろつていた。おそらく仲良くなつたお友達なのだろう。一人は頭に大きなハイビスカスを咲かせ、スカートのように花弁を広げる植物族の女性である。

仲良き事は美しきかな　さすがのジャンも空気が読める男だ。ここで「行く行く！」と笑顔で大手を振る愚か者ではない。

「あー、悪い。今日はいいや。また今度な。じゃあみんな、サニーの事よろしく頼みます」

言いながら彼女の頭に手を置いて、冗談っぽく頭を下げる。

彼女らはくすくすと笑いながら、「いえいえ」だの「こちらこそ」だと親切に返してくれた。

「サニーちゃんのお兄さんって面白い人だね」

「えへへ、まあね。自慢のお兄ちゃんです」

妹のような存在だとは思つていた。だがそれでも血は繋がつていなし、そもそもジャンは人間で、サニーは妖精族エルフだ。まず物理的

にありえないことだが、彼女らも”兄のような存在”と聞いてそのまま走るのだろう。

彼は思わず少しだけ驚いてから、納得し、軽く手をあげた。

「それじゃ、また明日」

「うん、じゃーね！」

もう寒さに怯えることも身を震わせる事もある必要がない春。

そして労働の必要もない、一日を過ごして僅かな疲弊すらない夕方というのは懐かしすぎて、ある意味新鮮だった。

ジャンは大きく伸びをして道を歩く。やがて近づく寮の前はスル。

トロスは姉と待ち合わせをして帰ってしまったから残念なことに一人ぼっちだが、ここを敢えて利用して街をぶらぶらと観光するという手が残っている。特に城周辺には店も少なく民家もあまりないが、だからこそ興味深い。

また適当に店を見てまわるのも良いだろう。いかにも暇人で商売の邪魔になるだろうが、なんにしろ今程に落ち着いていて、なおかつ労働が無い日は無いのだから、ただ帰つて寝て潰すのもつたないようと思えた。

「ほー。んつとに、いつ見てもすごいな

やがて城の前にまでやつてきて、思わず足を止めた。

清々しい程に巨大で荘厳。縁のない場所のようで、騎士になればここに仕えることになるのだ。これからは飽きるほど見ることになるのだろうが、それでもジャンは、それから少しの間田を離せずに入った。

そんな事をしていれば、やがて風景の中で動く物体に注意が向く。

それが　不意に空へと高く飛び上がって、こちらに向かってくれるものならば尚更だ。

「なつ……えつ、ちよ

ただの鳥だと思っていたが、その姿異様に大きすぎた。そして近

づくにつれて、それが翼を大きく広げ楽しそうに空を滑空する女性の姿だというのが見えた。その姿が、ちょうど自分の元に突っ込んでくる事もばっちりと。

空気を切り裂いて、まるで重力によつて地面に吸い寄せられるかのような滑空。楽しげに頬を上げて笑みを作つているものの、瞳はまっすぐとジャンを睨み、瞬く間に切迫。

息を吐く暇もなく突風と共に迫り、その四本の趾<sup>あしゆび</sup>が彼の顔面を掴まんと広げられて。

「う、わー」

頭を抱えるようにして屈み込む。

直後に鳥人は、暴風をまき散らしながら数メートルほど後方の地面に着地した。翼をバサバサと羽ばたかせて体制を整え、ごく優雅な着陸である。

心臓が破裂する勢いでバクバクと激しい鼓動を繰り返す。

思わずへたりこんでその姿を眺めていると、彼女はくるりと樂しげに振り向いた。

肩に届くくらいのライトグリーンの髪を振つて、それからジャンにこれでもかと言つほど笑顔を向けた。

「じめーん、驚かせちゃった？ でもじつといつち見てるジャンくんの方が悪いんだからねー？」

と、まるで自然に名前を呼ぶ彼女にうろたえる。

彼女はそれに気づいたように、そういえば、と続けた。

「あたしはアヒロ。ほら、獣人の時に居たの、覚えてない？ ミキモシイナも会つてゐて聞いて、どうもズルイなつて思つてさー」  
楽しげにカラカラと笑う彼女は、大きく胸を反らしていた。そしてそこにもフワフワとした羽毛が顔をのぞかせていて、また豊満な胸が笑うたびに揺れていた。

胸の谷間が見えるような穴の空いた、首を包むように襟がある長袖のシャツを着る彼女は、それ故にその鍛えられ引き締まつた抜群のスタイルが浮き出ていた。

だからこそさか冷静になつたジャンにとつては、存在そのものがあらゆる意味で刺激的であり、眼を逸らさざるを得なかつたわけである。そうすると、自然的に無言になり、

「ん、どうしたの？　まだ驚いてる？」

なんて、未だへたり込んでいたジャンへと屈み込んで、覗くように顔を近づかせた。

「あ、いや……は、ははは。驚きましたよ、突然飛んでくるんですから」

自分が情けなく赤面しているのを感じながら、精一杯の虚勢を張る。決して動搖せず、平静を装つて対処してみるが、無駄だった。アエロはそれから自分の谷間に興奮している事に気づいて、ははん、と鼻を鳴らした。

彼女は趾<sup>あしおび</sup>でジャンの腹を掴むと、そのまま被せるように乗りつけた。

「へえへえ、聞いたとおり、異人種は全然、平気なんだ？」

「へ、平氣つたつて、この街じゃみんな平氣でしょう？」

「そりや年季が入つてる人はね。ジャンくんの歳だと、慣れてても親しくお友達つてのは珍しいよ」

「あー、そうですね……」

クラスの中を思い出せば、彼女の言葉通りなのが分かる。確かにある程度の会話を交わしたりはする。だが一緒になつて遊んだり、遊びに誘つたりなんて事は今までなかつた。

「今日は一人なの？　いつもあのエルフの女の子と一緒に居るけど」

「ああ、サニーは友達と遊びに出かけて、今日は一人ですよ。暇なもんで、街でもぶらつこうとかと」

「へー、それじゃあ」

と、彼女は翼をジャンにつきつけ、羽毛で鼻先をくすぐつてみせる。

それが妙に淫靡な行動に思えてしまつのは、彼の意識がそちらに偏っているためだろうか。

「お姉さんと一人きりで遊ん」

アエロがイタズラっぽい笑顔を向けて、そう口にする刹那。

それをものの見事に雰囲気”とぶち壊しにして声を掛ける輩が現れた。

「お、ステイール、奇遇じやん」

そんな無作法な声に思わず肩を弾ませる。

驚いたように、肩越しに後ろを振り返り見ると、そこには一人の男が居た。人間の、彼と同じ制服を着る生徒だ。

加えて説明すればクラスメイトである。

獅子のタテガミのように逆立たせた髪が特徴的な者や、長髪を後ろで括る者。共通しているのはジャケットを脇に抱えて、ワイシャツのボタンを胸元まで開ける妙に露出度の高い格好をしていることだろう。

そして一週間過ごしてわかつたことだが、異様なまでに異種族に差別的である。

「どしたん、そんなとこで寝そべつてて。人外に食われてんの？」

男が言うのは極めて差別的の台詞だ。だが心の底から異種族を恨んでそう口にする皮肉的なソレではない。単なるその場でのノリであり、悪ふざけだ。

百歩譲つて、人間同士ならまだ伝わる。あまり良い印象を抱いてなければ笑えるし、友達同士なら縁を切る覚悟で制するか、愛想笑いで済ますだろう。

だが異種族には通じない。

誰も、見ず知らずの人間に、外見が違う、故郷が違うという事だけで馬鹿にされれば頭に来るだろう。

ジャンはだから、その刹那に振りまかれた殺意を機微に察知して足にタップし、アエロに降りてもうつて立ち上がった。やがて目の高さが対等になる。

頭に来るのは、異種族が大好きなジャンも同じだった。

「なあステイール、たまには人間と遊ぼうぜ？　お前学校に来てか

らずつと人外に付きまとわれてキツいだろ」「

「そうそう、今からアクセ買いに行くんだけど、一緒に行かね？」

馴れ馴れしく肩を掴み、組む。

不快な体温が服越しに伝わり、ジャンは思わず嫌悪した。

作法も礼儀も何もない、恐らく義務教育を経て高等教育を受け、以降の六年間をろくに学ばず無為に捨てたのだろう。なぜ合格したのかが不思議な連中だった。

「キツいのはお前らの方だよ」

「ああ、言つてしまつた。

大した葛藤もなかつたが、いざ口にしてしまつと何かが崩れてしまつたように思う。

ケンカなんてしたこと無い。だが胸を焼く怒りは久しづりだ。

これでクラスでは迫害されるだろうが構わない。学校にはお友達を作りに来ているわけではないのだ。

何が起こつたか分からぬように、ぽかんと口を開ける男の腕を振り払つて彼らを引き剥がす。

「あ？　お前何言つてんの？　舐めてんの？」

「どんな場所にもお前らみたいなのが居るつてわかると、嫌気がさすよ。おれはお前らみたいなのが大っキライなんだ。お前らみたいなのを、なんて言つたか知つてるか？」

「は、テメエ調子こいてんじゃ」

「口が臭いんだよ、ド低能が」

食い氣味で吐き捨てる、およそ口にしたことのない悪意。

喉が、顎が、四肢が痙攣するように小刻みに震える。自分が何か、とんでもない事をしているような気がしたが、なんだかどうでも良くなつてきた。

男がツバをまき散らしながらジャンの胸ぐらを掴み上げる。もう一方で、手持ち無沙汰の青年は振り上げた拳を、何の迷いもなく彼の頬に振り落とした。

衝撃が顔面を歪め、骨を伝達して脳みそを激震させる。

ひどい痛みだ。とても、簡単に決意して相手に与えられるものではない。となれば、彼らはそれに慣れていて、人の痛みを無視して攻撃ができる立派な兵隊なのだろう。

思わずよろけて跪く、が。

「炭鉱マンの体力舐めんなよ！」

立ち上がりざまの殴打。顎を殴り上げれば、タテガミの男は大きくなっけぞって、よたよたと後退。のちに尻餅をつく。顎から素直に衝撃を伝達されたがゆえに、彼の眼にうつる世界はぐるぐると回っていることだろう。

さらに長髪の男へと拳を構えるが。

「やめなさい！」

翼から離れた羽毛が振り上げた腕に絡みつき、まるで縄のようになつて動きを止める。

それと同時に、アエロが傍らに現れた。

「一発は一発。それ以上はダメ。それに……」

キッと、先ほどの殺意を込めて彼女は一人組を睨みつけた。だが、その殺意の源になる感情は、先程とは大きく異なっているのだが。

「あんた達も分かっているでしょう？」

ジャンに言い聞かせるものは大きく変わる、冷淡な言葉。  
そして彼らもソレを感じ取ったのだろう。立ち上がり、衣服の汚れを払う暇もなくバツが悪そうに背を向け、退いていった。

「バカじやないの？ 確かに異人種に優しくしてくれるのは嬉しいけど、人間は人間と仲良くなきや、ダメなのよ？」

広場のベンチで、ジャンとアエロは隣り合つて座つていた。

頬の殴打は大した威力ではなく、口の中を切る事はおろか頬が腫れ上がる事すら無い。

「バカつて……まあ、感情に流されたのには確かに後悔しますが、それぞれアイスを口に運びながらまどろむ夕方。

アエロに奢つてもらつたのは少し恥ずかしいような気もするが、助かつたことには違いない。

「でもお姉さん、ちょっと嬉しかったな。ああいう、男氣のあるのは嫌いじゃないよ」

「はは、喜んでもらえれば良かったですよ」

「コーンまでを食べると、アエロは「よいしょ」と立ち上がる。それから腰を曲げて、ジャンに顔を近づかせると、そのまま舌を伸ばして頬についてアイスを舐めてみせた。

「……つ？！」

「あはっ、こりゃのは初めてだつた？」

頬に伝わる熱い、柔らかい感触。鼻をかすめる甘い匂いに、その全てに頭の芯が煮えたぎつてしまいそうになる。頬が、顔全体が真っ赤になつて、彼女は楽しそうに笑つた。

「でもね、お姉さん大奮発してもつとお礼したいんだ。貴方みたいな人は初めてだから。あの獣人の時のお礼も兼ねて……ね？」

彼女はそう言って、優しい微笑みを見せた。

「くつ……、あ、アエロさん……もひつ！」

イキそうだ。

凄まじい重力が身体に直接振りかかり、さらに全身を凍えさせるような突風の中で、ジャンの意識は幾度ともなく逝きかけた。

彼は今、地上から遙か高く離れた上空に居た。

腹を驚掴みにする鳥足が肉に食い込み、そしてそれを成している足の上には楽しげに空を舞うアエロの姿が。

なんでも彼女は今日仕事が休みで、暇を持て余していたらしい。騎士にも休みがあることに少し安心したが、彼女が暇つぶしのために誰かを誘おうとしていた所にジャンを発見したという経緯だった。そして思いもよらぬ男氣あふれる行動に彼女は気を良くして、空中散歩へと相成った。

聞く話によると鳥人族はある程度の信頼や親密度を築かなければ、

「ういつた共に空を制するような行動は取らないと聞いたから良いことなのだろうが。」

目が回る。

下を見るしか無いジャンは暫く前から目をつむっていたが、いよいよ自暴自棄気味になつてきて目を見開いた。が、景色がまともな景色として彼の脳に刻み込まれることはない。

「どーしたの？ もう限界？ まだ三 分も経つてないよ？」

「い、一時間経つてます……」

「あはは、そうだけ？ やつぱり楽しいと時間が経つの早いね。ジャンくんはいい男だし、独占したくなっちゃう」

「は、はは、そりやどうも」

呼吸が出来る事が幸いかかもしれないが、全身に突き刺さるような突風や、速度やらでいい加減グロッキーになつてくる。

そもそも掴まれ方からして、捕獲された魚かなにかのようだ。いくら仲睦まじくなつたとしても、これでは恋人同士なんかではなく、獲物と獵師にすぎない。

「でも、いい景色でしょ？ 風も、気持ちいい……」

速度をやや緩めれば、空中と飛び交う鳥と同じ速度になる。

肌に触る風は途端に柔らかなものになつて、上空からの光景も、いくらか落ち着いて見学できる。

となると、その新鮮な光景はあまりにも広大で、思わずため息が漏れた。その余裕が出てきた。

「うわ、上空そらから見ても街でかいですね」

円形のようになる外壁の中に存在する巨大な街。空の上からでもその大きさは随分と目立つものだ。

そこから黄土色の道が草原の中を突っ切り、道の通過点には森が生い茂る。

またその道とは逆方向、城がある近くから外へと伸びる道の先には海があり、近辺には小さな漁村らしき集落があった。

大雑把に見れば森の先にも小さな町があり、上空でさえ小さく、

豆のような大きさに見えてしまつ街がさらのその奥にある。それがジャン・ステイールが保護されていたロロンという街だ。

あらゆるものが小さく見えるその位置で、ジャンは世界の広大さを改めて認識した。

この広い大地の中で、こんなちっぽけな人間が四苦八苦して生きている。そう考えれば、異種族だと人間だと、そういうものが小さく思えてくる。

「はは、アエロさんはこつもこの世界を見るんですか？ 羨ましいなあ」

「でしょ？ いいわよ、空は。小さい事がつまんなく思えちゃうもの……あ、そうだ！」

「どうしたん」「

ポイッ、と。

ジャンの腹を驚撃みにする痛みが、不意に喪失した。  
にわかに彼を取り巻く重さが失せたと思うと、身体は大地に吸い込まれるように自由落下する。

風がまた暴風となつて全身を翻り、臓腑が全て浮き上がるような不快感を催した。

「でええええええええっ！…」

だからそんな間抜けな悲鳴も気にならず、

「ほら、抱きついで！」

田の前に、垂直に降りてくるアエロにさえも、何の感情も抱けなかつた。

ただ藁をも縋る思いだ。だから彼女の言葉は既に耳に届かず、ただ手を伸ばし、その細い体躯を抱きしめた。

それから少しの間は速度がやや緩むだけで、バサバサと幾度か翼をはためかせれば、ようやく緩慢に落し始める。

豊満なバストに顔を埋めていたジャンはそこでよつやく、己の破廉恥な行動に気がついたが、どうじよつもなく、その密着体勢のままアエロを見上げた。

「あははっ、ごめんね？ 足が疲れちゃって」

「な、なら降りればよかつたじゃないですか……」

どれだけ平静を装つても、激しく高鳴る心臓は彼女に伝わつてしまつ。そして、それが落ち着いた今でもなぜだか元に戻らない理由さえも。

彼は再び頬を赤く染めて、横を向いた。

「いい景色なんでしょ？ だつたらもうと、少しでも長く一緒に居たいじゃない」

まるで空中で直立するような形のまま、彼女はゆっくつ回るように振り返る。景色は、海の方向へと転換した。

「これを見せたかったし、ね」

海に大陸が飲まれていくような砂浜。その先には、空の色を写す蒼い海が広がり、その先はにわかに赤くなる。

水平線に身を沈めつつある太陽は、それまで世界を明るく照らしていたソレだった。

今まで見たことのな光景。

水面はキラキラと揺れて光を反射させ、ビック偉大をさえ覚える凄まじい風景だ。

ジャンは思わず嘆息した。

「……すごい」

としか言えない、語彙のない自分がなんだか情けない。アエロに申し訳なくなつてくる。

「でしょう？ ヤなことがあつたらいつも見に来てるの。でも、今度からはジャンくんを見ればそれがすんじやうわね」

「な、なぜですか」

「だつてこの思い出を共有した相手だもの。貴方を見れば、今日のことを思い出せるし」

と言ひながら、彼女はその翼で、ジャンの頭を包むように抱いた。「何があつても前だけを見るのよ。後ろに夢なんかないんだから」そうして、ゆっくりと空を惜しむようにして彼らは下降する。

奇妙なまでに心に残るその言葉を胸に、ジャンは地に降り立ち、アエロと別れて、急ぐわけでもなく、家路についた。

## 戦闘訓練、開始

「あー、今日は校庭三週したらここに集合だ」  
そう告げる戦闘教官の言葉に、校庭に集まっていた名々の表情は徐々に弛緩してくる。

これまで一週間ほどずっと校庭を走ったり、筋力トレーニングをしたりなど体つくりが基本だった授業には無かつた発言である。そこからそれぞれが察するのは、『実技』という言葉だ。

実際に木剣を握り、あるいは弓、槍を手にして戦うための訓練。それが、脳裏によぎつたがゆえに彼らは喜んでいた。

体力づくりは確かに大切だが、退屈で、さらにしんどい。これが午前中の授業に組み込まれていれば、次の授業に確實に支障が出るレベルの疲弊だ。というのは、ジャン以外の感想である。

そしてまた実技というものが未知である事も、彼らの興奮を助長させているのだろう。単純に「かつこいいから」という理由も、もちろんあるのだろうが。

「ようステイール、良かつたなア？」

そう言って背中を力一杯叩くのは、この間の二人組だった。

タテガミの男は嬉しそうに肘鉄をジャンの脇腹に突き刺して走り去り、長髪の男もその後に続く。

前回、アレがあつてから割合に陰湿な嫌がらせもなく済んできたと思ったが、ずっとコレを待っていたのかと思うと、『苦勞様とでもねぎらいたくなる。その意欲を他のことに持つていけば、もつと生産的な生活が出来ると思うのだが、彼らにとつては余計なお世話であり、言つても無駄なことなのだろう。

因縁を買つだけだ。

ジャンも自分のペースで走りだすと、すぐ横にトロスがついてきた。

「さつきの連中と何があつたの？」

「いや、特に何もないけど」

「……相談してくれよ、友達だろ？」

最近のトロスはなんだか落ち着きを持ち始めている。

早くもなんらかの成長を遂げたようで、風によって後ろに流されてオールバックになる彼は非常にナイスガイだつた。

童顔かと思っていたが、顔だけを見るとなかなかに渋い。ジャンはそういった意味でも見直し、肩をすくめるように頷いた。

「あいつら一回ぶん殴つてから田え付けられるみたいなんだぜ！」

思い出しながら言えばなんだか心の奥底からふつふつと負なる感情が沸き起こつてくる。だから極力元気に振る舞い親指を突き立てるど、「誰だお前」と突っ込まれた。

「何か嫌がらせとかされてる？」

「いや。ただ同じ寮だから、部屋の扉思い切り蹴つ飛ばされたり、トイレットペーパーが常に切れてたり、風呂入つてる時に服破られてブレーカー落とされたくらいしかないねえ」

寮は共同住宅とは違い、一軒家の中に自室をそれぞれ作り、台所やトイレ、風呂などを共同に使うようになる。そして彼らも同じ寮住まいであるためにそういう事が起こり得た。

もつとも、上級生も居るためにそうそう目立つた行動ではなく、それこそ隠れてこそこそそういう訳だ。

「うわ、典型的なイジメじゃん。やり返さないの？」

タツタツタ、と教官に目を付けられない程度の速度で五メートルある外周を走り続ける。

トロスもこの一週間である程度鍛えられたのか、慣れたのか、呼吸を乱さずに会話を続けられていた。

「やり返したつて、火に油注ぐだけだろ？」

「そんな事言つたつて……」

「だから大丈夫だつて。飽きるまでやらせときゃ良いんだよ」

「そ、それじゃあ……多分、異人種グループの空気が悪くなるよ。キミはただでさえ評判良いんだから」

「まあ外交官的な意味だけだ」

クラス内でも異人種から人間へ、直接何かを伝えられる事はない。多くはジャン・ステイールを介した伝達となり、あつたとしても事務的な会話以外は行われない。

そもそも、これが普通の姿だった。

世界から見れば、この国の在り方が少しばかり異常なのだ。

確かに世界的には受け入れられた存在だが、という具合である。クラス内は見事な縮小図になっている、と言つても過言ではない。

「なんでこんなことになったのや……」

「ぶん殴つたからだろ？ まあ、キミの事だからどうせ逆恨み的なものだろうけど」

「いや、そっちじゃない」

「ああ、そっちね。まあ、なんでだろう。普通に接してくれるからじゃない？」

とはいって、人間側だってなぜ普通に接しないのかがジャンにはわからなかつた。

確かに見た目のインパクトはあるが、それこそが異種族の特徴だし、そこに魅力さえある。個人ごとに感想は異なるだろうが、一、二週間ほどが経過してその改善が見られないというのは根本的な何かがあるのだろう。

親に「付き合つてはいけません」とでも釘を刺されているのだろうか。

だが彼らとて最低でも十八歳だ。自己判断でどうにかする筈だし、わざわざこの国に来ているのにもかかわらず”異人種は苦手です”なんてもう意味が分からない。

だから、ようするにきつかけが必要なだけなのかもしれない。

となれば　圧倒的なまでに反異人種を掲げる輩は障害になつてしまふ。

「時間が解決するもんならいいんだけどさ　」

「まあそんな感じで、一人一組になつて打ち合つてくれ」

素振りを数回こなし、構え、振るい方を教えた後、教官は適当に

そう告げる。

そんな適当な指示に、思わずジャンは食いついた。

「ちょっと、教官！ そんなんで良いんですかッ？！」

「最初だからな」

「さ、最初なら自由時間みたいなもんでいいんですか？」

「まず道具に慣れなくちゃな。身体だつて出来上がつてるわけじゃないし。まあ経験者は居るが、少ないしな。殆どが高等教育からの入学だから、まずはこうじつた時間が無くちゃならない。お前だって最初は雑用から始まつたんだろう？ それと一緒にだ」

「そ、そういう事ですか……」

なんとなく分かる。

彼の言つ通りだ。誰もが入学に備えて身体を鍛えているわけではないし、しつかりと出来上がつてているわけでもない。彼らはここで肉体を作り、武器に慣れる。そのつもりで入学したのだから。

一年もあるのだからそつ急ぐことはないし、ジャンだつて最初に覚えた違和感を、今ではあたりまえのように感じている。それと同じで、このヌルい訓練が徐々に厳しくなつていく過程も、慣れてしまうだろ？

そうこうしていると、魔の手が彼の背中を勢い良く平手で撃ちぬいた。

スパークと小気味良い音が破裂音が響き、背中に鈍い痛みが走る。そういうふた行動をした男は、悪びれるでもなく肩を組み、ジャンを誘つた。

「なあスタイル、一緒にやろ？ ゼー」

やつてきたのはタテガミの男だ。

あたりを見渡すと、長髪の男は割と真面目にトロスと打ち合つている。しっかりと反撃させ、ゆっくりでありながらも組手となつているのを見るに、長髪の事は少しぐううと思つた。

「あー、そうだな。ちょうど余ってるし」「

言いながら、二の腕を力一杯つねる男にイラついた。

なんて幼稚なんだろうか。

こうやってはしゃいだり、異人種を差別するのも、あるいは。それぞれが二人一組になつて木剣を振るい、受け、返す中で、やがてジャンとタテガミも対峙した。

「てめえムカつくんだよ！」

喧噪の中で、辛うじて教育には届かない程度の声音で叫ぶ。そして剣を振りかぶり、力任せにジャンが構える木剣へと叩きつけた。「スカしやがって、人外が居なけりやなにもできねえクセしてよ！」相手にあわせて剣を対面させ、受ける。容赦無い一撃一撃が、剣伝いに衝撃を伝播せるように腕を痺れさせる。攻めに転じる暇のない全力の攻撃に、彼は受けるので精一杯だった。

「クソ野郎が、この、このッ！」

「じゃあなんでお前は、そんなクソ野郎に一々関わるんだよ」

「ムカつくからだよ！」

「ひつそりと暮らしてるだろ。可愛いものじゃないか

「うつせ、黙れ！」

上段からの振り下ろし。ジャンは本能的に大地を弾こうとするのを防いで、剣を横に、頭上に構える。

やがて衝撃。

体重を掛ける一閃が木剣の腹を力一杯叩き、そして流される。頭上から脇へと剣が移動するのを感じながら振つてやると、タテガミの男は重心を崩したようにそのまま前のめりに倒れていった。

あれをまともに受けていれば、さすがに怪我にはならないだろうが、かなり痛い。そんな事でいちいち激昂されではジャンとてかなわないから起こした行動だつたが、やぶ蛇だつただろうか。

「おれが嫌なら無視してくれ。それがお互いのためだろう。わざわざ潰して、何が残るんだよ。気持ちの悪い爽快感だけだろ？」「スカしやがって！ なに余裕ぶつてんだよ！」

「スカしてねーって」

「だまれおまええええッ！」

男の中で何かが切れた……何か、決定的な何かが。

肩肘を張つて振り回す剣撃を、ジャンは仕方なくいなしながら受け続ける。

一撃、それはそれは重い一撃だが、腕だけの力で振るうそれらだ。さらに構えもきこちなく、棒を振り回すのと同じ感覚だ。路上でのケンカと同意義。剣を剣としてではなく、一つの道具として扱う意識。

故に攻撃を防がれた事によって跳ね返る衝撃は、彼の身体に蓄積されていく。これまでの訓練を適当に過ごしてきた青年なら無意識の内に限界は近づいているだろう。

そしてその時は、大した時間も置かずにやつてきた。

ジャンが剣を受ける。衝撃が彼に、そして男に伝わり 柄が男の手の中からすっぽ抜けた。

木剣は空中でぐるぐると回転して、弧を描いて彼のやや背後の地面に突き刺さる。誰にも当たらなかつたのは、彼の自棄氣味の乱舞に周囲が気づいて、空間を作ってくれていたお陰である。

「て、てめえ……！」

思わず崩れ落ち、上目遣いで睨んでくる男に、ジャンは大きく嘆息した。

「本当ならお前なんか徹底的に無視するんだけど……腕、痛いだろ？ 冷やすかマッサージするかしないと明日から響くぞ。医務室行ぶべらつ！？」

格好良く手を差し伸べる。男は呼吸を乱しながら勢い良く、その手に伸ばした拳を振り上げ、ジャンの顔面に叩き込んだ。

ジャンは不意打ちを素直に受け、視界がぼやけるのを見た。

世界が一転し、今まで地面を見ていた筈なのに、気がつけば空を仰いでいた。

どさりと音がして、背中から全身へと衝撃が走る。痛い。受身も

取らずに倒れてしまった。

「は、はつ？ ぱっかじやねーのめえ？ 僕を舐めすぎ、なんだよ。医務室ぐらい一人で行けるつーの！」

しかしあま。

こんな真っ直ぐなヤツばっかなら、やりやすいんだけどなあ。足音が遠ざかっていくのを聞きながら、ジャンは大きく息を吐いて微睡まどろんでいく。

意識は間もなく、ブラックアウトした。

「ジャンくんって結構バカなのね。カールなんて無視してれば良かつたのに」

レイミィはどうろを巻く尻尾をジャンの上に乗せてそう言った。結局授業が終わった後に意識が回復し、タテガミの男『カール』も授業を抜けた後そのまま帰ってしまったらしい。ひとまず関わりたくは無いから、向こうから何かをしでかすまで放置で構わないだろつ。

そして医務室の寝台に寝かされているジャンを待つのは、サーとレイミィ、そしてトロスと……。

「あー、どちら様？」

「わ、忘れたの！？ あたしょ、テポンよー トロスのお姉ちゃんね！」

なんて激昂するのは、いつぞやの深夜にジャンの部屋に忍び込んだ弟想いの姉テポンだった。

「は、はは。冗談つすよ。ただ長い間見なかつたんで、ちょっと誰かなーつて思つてただけで」

「しつかり忘れてるじゃないのよ。脳みそ発酵してんじゃないの？」

「それ、いいすぎ」

「まあ何にしても話は聞いたわ。いじめられてるなら相談すればいいのに」

「こじめつたつて……ただのケンカでしょう？ 第三者が入るよう

な事じやないつすよ「

イジメだと言われて思い返してみれば、イジメといつのは言います  
ぎなような気がする。

ただの個人の憂さ晴らしであり、嫌がらせだ。イジメの定義は分  
からないが、そういうたものではないような気がする。

もつとも、ここまでやられて彼を擁護するつもりなどは無いし、  
その義理もないが、かといって友人らに本人の居ない所でボロク  
ソ言つてもらうのも気が引ける。非常に卑怯で卑劣な感じがする  
だ。

そもそも鬱陶しいと思つてゐるだけで、ソレ以上の感情は無いの  
だから。

無関心といえばぴたりだらう。

更生させるつもりは毛頭ないし、仲良くするつもりも同様。生活  
が脅かされなければそれでいい。

グレるキッカケは、こういうたものなのかもしけれない。  
漠然と考へながら、カールに少しだけ同情した。

「まあ話はもう終わりですよ。もうカールが手を出してこなければ  
いいし、来たら来たで話し合います。迷惑とか、そういうんじゃ  
なくて……こう、おれたちの問題、みたいな？」

しかし、と思つて周りを見てみる。

すると、扉の近く、部屋の隅で腕を組むクロコの姿を発見した。  
そして気づいたのだが、見舞いに來ているのは全て異人種だった。  
人間は誰一人としていない。

身体から妙なフェロモンでも出しているのかと疑いながら、彼は  
それで自分の立場を再認識した。

「あ、そうだ」

と手を叩くのは、テポンだった。

「うちに来ない？」

と誘うのも、テポンだった。

「イヤですよ

即答してみる。

腹の上でとぐらを巻く蛇の尾が、なにやら意図的に腹部を圧迫するような窮屈感を覚えた。

「ス、スミマセン……今日はなんだか食欲が無いので……」「ジャンくん本気で言つてるの？」

レイミィが小馬鹿にするように言つてくる。眉尻を下げ、可哀想なものでも見るような顔だ。

同情されているようで悲しくなってきた。

カールもこんな気持だったのだろうか。

人はこうして、分かり合つていくるのだろうか。

「家で生活しない？ って、先輩はそう言つてるのよ  
「リアリイ？」

「だつて居づらいでしょ。他の人の迷惑になるかもしれないし」

「あー、そういう見方もありますねえ」

尻尾をタップして重量を軽減してもらひ。

すると、レイミィはなぜだか腕を組んでそっぽを向いてしまった。  
おれが何をしたってんだ。

「ねえジャン、そうしてもらつた方がいいよ。せつかくこっちに来てゆつくり出来ると思つてたのに、家でも疲れちゃうよ？ 本當だつたら私の部屋でいいんだけど、寮長さんが厳しいから……」

「あ！ ジヤあサニーちゃんも一緒に家に来ればいいのよ！ 家広いし、部屋は無駄にあるしね。トロスはいいでしょ？ それで」「姉さんの好きにしていいよ。まあ、ジャンの判断が一番だけどね」「ほりジャンくん、先輩の好意をどうするの？」

尾先がチロチロと揺れる。それを腹の上で見ながら、ジャンは静かに頷いた。

もうどうにでもなれ、というのが正直な所だ。

「じゃ、じゃあ週末にでも、お邪魔します……」  
そういう事になってしまった。

## お引越し

寮の退去にはそう時間はかからず、事務係から書面を渡され、理由と署名を記してから約三日ほどで許可が降ろされた。

紙製品からなる板状の包装資材を箱に組み立て、荷物を整理しつつ中にぶち込む。蔵書や着替え、教科書など。他に何かあるかな、と部屋の中を漁るが、そもそもこの街に来る前ですら大した荷物がなかつたことを思い出す。

やがて約束の週末が訪れた。

一連休の初日。

テポンは荷車を引いてやってきた。

「……これが、先輩の自宅ですか」

「なにを今更、先輩とかガラじやないわね。いつも通りでいいわよ」

そこは噴水広場から東に進んだ所にある。

少しばかり進めば、鉄門に薦が巻き付いたり、その奥には噴水のある庭などが多く見られる館が殆どの、この城下町でも一等地と呼べる区画に入る。彼女の家は、その通りの中心部付近に建っていた。他と同じように鉄門が侵入者を拒み、外から見える庭には芝生が敷き詰められている、小奇麗な光景が目に入る。そしてその奥にあるのが大きな屋敷だ。

一階建てだが、厳かで、だからといって目立つわけでもない、良くも悪くも他と同様の館と言つた風の建造物である。

「さ、入つて」

施錠のされていない鉄門は、少しだけ重い手応えをみせてから、滑るように開いていく。鏽びているわけではなく単純に重量のせいだろう。彼女は全てを収納部分に押し込むと、大きく息を吐いた。

「ようこそ、我が家へ」

「お邪魔します、と、これからよろしくお願ひします」

「わ、私も来て、本当に良かつたんですか……？」

サニー・ベルガモットは不安気に口にする。そしてそれを表すよう に両手で胸を抑える所作を見せる。テポンはそれに苦笑するよう に、

「だつて兄妹きょうだいでしょ？ 一人ぼっちは寂しいもんね」

それから優しい笑みを見せて、サニーの頭を優しく撫でた。まる で姉の風体だ。ジャンはそう思ひながら、荷車を引いて門から中へ とお邪魔した。

芝生が敷き詰められている庭には、されど噴水は存在しない。 その代わりとばかりに、ローズアーチを始めとした多種類の花が庭 の一画を占めていて、ちょっととした庭園になっていた。

そこにはジョウロを片手に、そういった花壇などを手入れするつ なぎ姿がそこにある。気配や物音に気づいたのか、ソレはゆっくり と振り返り、やがて彼らを視認した。

「ああ、お嬢さん……と、そこの薄汚い小僧と可愛らしい娘さんは ？」

頭に被る麦わら帽子を取り、彼はジョウロを置いて歩み寄つくる。 ジヤンを一瞥すれば眉間にシワを寄せ、サニーを見ればにこや かな笑顔を見せる、ある意味紳士的な男だ。

「パスカル、話したでしょ？ 今日から家に住むことになつたジ ャン・ステイールとサニー・ベルガモットよ」

男は腕をまくり、首にさげるタオルで額の汗を拭いながら、やがて彼らの前に止まる。

短髪の頭を搔き鬯るよつにして、パスカルと呼ばれた男は大きく 息を吐いた。

「冗談が何かで？」

「……言わなかつたかしら」

「聞いてないつスよ！ 大体、住むつてんなら昨日今日の話じやな いでしようツ！？」

「でも、他の一人とトロスは歓迎会の買い出しに行つてゐるけど……」「うわあッ、また除け者かよ！」

大げさなまでに頭を抱えて跪くバスカルをよそに、テポンは彼を指さし、ジャンらに紹介した。

「お手伝いさんのバスカル。こんな感じの男よ」

「ど、どうもよろしく……お願いします」

「これからよろしくおねがいしますっ！」

一先ず一礼。これから世話になる相手に、心から深く頭を下げる  
と既に立ち直り腰に手をやるバスカルは、ふふんと鼻を鳴らしてジャンを見下ろしていた。

「お嬢さんを始めとする女性に手を出したら俺が直々に殺す。いい  
な？ それから」

途端にニヤニヤと表情を綻ばせて手を差し出すのは、サニーに対  
してだ。

下心丸出しのバスカルはそれから声色を変え、咳払いを一つ。  
「お嬢ちゃん、何かわからないことがあつたり、不便なことがあつ  
たらいつでもなんでも言ってくれ。俺はいつでも君の味方だよ」

「……ジャンに悪いことしたら許しませんよ？」

上目遣いで睨みつけて、サニーは彼と握手を交わす。

ぎょっと顔を強張らせてからバスカルはジャンを一瞥し、舌を鳴  
らした。

「善処します」

「さ、バスカル。業務に戻つていいわよ」

「ぎょ、業務つたつて……みんな朝つぱらからどつか行つちゃうか  
ら、暇で仕方なくやつてたんスよ。俺で良ければ、荷物運びの手伝  
いでもしますよ。ジャンくんのもな！」

厭味つたらしく強調し、彼はテポンの了解も得ずに玄関へと歩き  
出す。

彼女はそんな彼に肩をすくめてから、二人を案内するように先を  
歩いた。

玄関から入って右手側に伸びる通路には窓から差し込む日差しが、心地よく室内を照らしていた。壁には五つの扉が並び、説明によればそこがお手伝いさんの私室らしい。

そちらに正面右手側には一階へと続く通路があり、その脇には奥まで続く通路。突き当りの扉はバスルームであり、左手側の壁、そこからほど近いドアはトイレらしい。それより遙か手前の、両開きの扉は大広間に繋がるものであり、主な団鑑や食事はここで行われるということだった。

家主の自室は階段の上にあり、正面の壁には私室が。その反対側の壁には、密室が並ぶ。

ジャンらはその中から、扉に打ち付けてある、真鍮プレートに刻まれた自分の名前を探して、そこに荷物を運び入れ 終えて、それぞれの部屋で休憩していた。

「しっかりまあ、おれがこんな所に来ることになるとはなあ……」

夢のようだ、とジャンは思う。

キングサイズのベッドは、部屋の中央壁沿いに鎮座する。扉の近くには大きなクローゼットがその存在を隠すこと無く堂々と置かれて、さらに本棚さえもある。それでも尚、部屋が狭く感じることはない。

レースのカーテンがかかる窓は両開きのガラス戸であり、開ければ半円形のベランダが備え付けられている。そこの近くの壁には、これまた大きな机があつて。

ジャンは思わずため息をつく。

これでもう一桁に上るソレだ。

夢のようだと、心の底から思つ。

きつかけはひとつであれ、まさか、冗談か何かではないのかと疑いたくなる。

それほどまでに彼は浮かれていて、思わずその良く身体が沈み反発する寝台に寝転んだ。

「にやつ？！」

刹那、悲鳴が聞こえる。

慌てて身体を転がすと、そのすぐ後ろ、腰の辺りにはもつこりとした妙な感触があつた事に、そこでようやく気がついた。その盛り上がりはのそのそと移動して、足元から落ちる。軽い音を鳴らして姿を現したのは、まごう事無き猫だった。

大きさからしてまだ子猫なのだろう。

小さな体躯は一度ジャンに背を見せてから、くるりと振り返って、彼の姿を見る。しつぽをゆらゆらと揺らすその姿は愛らしいの一言に尽きる。

「ネコかー。ネコかわいいなー」

座つたまま前屈体勢になつて手を出し、指を揺らす。が、興味なさそうに顔を逸らすと、そのまま悠々とした足取りで扉へと向かう。ジャンはその後についてドアの隙間を少し開けると、ネコはそのまま隙間を抜けて出でていった。

ジャンはそれから、箱を開けて荷物を出す。壁に立てかけたブロードソードはそのままにしておいたとしても、制服やらは早い所ハンガーに掛けてしまわないと皺になってしまつ。

それに、荷物整理を後に回しても良いことなど無いのだ。

彼が決意して行動を起こすその瞬間に、ドアは勢い良く開かれた。

「アンタがジャン・ステイールね」

扉を全開にして、壁に叩きつける。

黄金色の長い髪を翻すのは女性であり、四肢は毛皮に、手足は肉球に覆われている。頭に、尻にはネコの耳や尾が生えていて 考えるまでもなく、彼女は先程のネコなのだろう。

完全にネコに擬態できるのはかなり高度な技術を要すると聞きかじつたが……どうあれ人並の知能を持っているのだ。それを理解した瞬間、ヒエラルキーの下級層に落とされていくのを、彼は感じていた。

「ええ、はい。これからよろしくお願ひします」

「つまんなそうな男ねえ。まあいいわ、そんな感じでよろしく。種族はなんなの？」

「種族、ですか。えー……人間、ですかね」

「人間？ ヒト？」

その大きな琥珀のような眼を見開き、縦に長い瞳孔をより細くして彼女はジャンを見る。腕を組んだまま、腰を折り曲げるようにして視線を近づかせる。

「……ビビんじゃないの？」

それから、恐る恐るといった風に、珍しいものに触れるように声をかける。先ほどの、威圧的な勢いは既に失せているようだつた。

「いや、おれネコ好きですし」

「異人種よ？」

「そう言われてもなあ……」

困ったように頭を搔いてみせる。

なぜこんな愛らしい姿に恐怖しなければならないのだろうか。

剣を振り回したり、傍若無人な人だつたりしたら怯える、恐れるといった感情を抱くのは当然かも知れないが、ただ外見が少し異なるだけでそういうモノを抱くことはない。

これまでがそうだったし、そういう人間に対する理解はあっても、ジャン自身納得はしていない。

そうしてまた、それだけで異人種に自分が評価される事も、しつくり来ないのだ。

ただの感性の違いなのに良い評価をもらつ。好意さえ持つてくれる。そんな彼らに、どこか後ろめたさを感じるような気がした。

「へえ、見る目あるじゃないの。あんた」

「はは、ありがとう。えーと……」

「タマよ。ここでは一応ネコとしてやつてるからね」

「タマさんは」

「呼び捨てでいいわ。ネコに敬称つて、気持ち悪いったらありやし

ない」

身を抱くようにして、冗談っぽくフルフルと彼女は震えてみせる。美女然としているのに、表現はどこか子どもっぽい。ジャンは思わず微笑むと、タマはキッと睨んできた。

「あに笑つてんのよ」

舌つ足らずのように不平する。

「いや。まあ、その……よろしく」

抑えられない興奮に、思わず頬がゆるむ。手を差し出して握手を試みると　肉球が、鋭くジャンの顔面を殴打した。

表面の、ちょっとした硬さの中にはマシュマロのようなやわさがある。お日様の匂いがして、ジャンは満面の笑みで寝台に倒れていった。

「……なに、こーゆーのが好きなんだ？」

軽々と床を蹴ると、タマは獣人らしい身体能力を発揮して軽々と寝台に飛び乗つた。大きく弾み、ついで彼女のたわわに実るバストが揺れるのを見ながら、ジャンはさらに頬をペチペチと肉球で叩かれ続けていた。

「ほらほら……そんなどらしない顔して、そんなに気持ちいいの？」

「あ、ああ……に、肉球！　肉球もつと！」

「うふふ、気持ち悪い……そんなに欲しいのなら、ほりー！」

「ああっ、あああああっ！！」

両手の肉球を力一杯顔に押し付けられる。

幸せだ。

もう、人生全ての運を投げ売っているのかもしれない。理性が潰える、彼はソレが失われるを感じていて。

「何やつてんの？　ふたりとも……」

テポンの底冷えするような声は、瞬間にジャンに理性を取り戻させて、また反射的にタマは寝台を弾くようにして床に着地した。

「肉球分を補給してました」

「補給させてました」

「……まあいいけど。わからないことがあつたら、いつでも聞いてね？」

「あ、ありがとうございます」

ひどく恥ずかしいところを見られてしまった。  
つい理性を投げ捨ててしまう程の事態に陥つたことは仕方のないことだが、自制しなければならないだろう。

しかし、こんな魅力的な存在が身近にいて、果たして理性が保つだろうか？

タマをちらりと見ると、彼女はニッと笑つて、八重歯を見せた。

「ははっ、可愛いやつめ」

新生活は、じうじて開始した。

## 休日謡歌 ～その猫に肉球はあるか～

なんでも、この屋敷にはトロス、テポンの他には三人のお手伝いさんに加えてタマ一匹だけの構成で、両親は不在らしい。亡くなっているという事ではなく、単純に”溝の門扉”<sup>ゲート</sup>の向こう側、つまり異人種の故郷で暮らしているだけであり、完全な放任主義ということがだ。

「うう……もう、朝……？」

ガラス戸から差し込む陽が床を照らし、その反射がまぶたを照らす。ジャンはそこから意識が少しずつ浮上して、やがて覚醒した。だが眠気に半身がどつぶりと浸っている状況である。夕べは荷物の整理や、緊張やらで深夜まで眠れなかつたこともあるが、なによりも布団が異様なまでに温かいことが一番の理由だった。

羽毛布団は熱を逃さず、さらにジャンの熱を蓄えて身体を温める。さらになると人の肌のような抱枕が熱を持ち、心地よい毛皮が身体に抱きつく感覚が酷く心地よくて。

「ん……？」

抱枕など、この部屋にはなかつたはずだ。

ジャンは、己が掴む手を少し動かす。と、彼がこれまでの人生で触れた何よりも柔らかく、最上の弾力を持つ何かがその中にはあつた。

薄く目を開ける。

共に、穏やかな吐息が顔に掛かるのがわかつた。

眼前に、タマの寝顔があつた。

絹の衣服は既に布団の中で大きく肌蹴っていて、タマはそのままジヤンを抱枕にするように抱きついている。抵抗するように体の前に突き出された両手は、それ故に彼女のバストを存分に驚掴む形となっていた。

「なんとこゝ事でしょう

思わず漏らすと、その声に反応したのか、タマのまぶたがぴくりと弾んだ。

それからややあって、

「ん、ん……っ」

艶やかな吐息と共に声を漏らし、力一杯抱擁するように伸びをする。

タマは、それから眠そうに目を開けた。

「どうしたの、ジャー？」

ジャーというのは、タマが勝手に名付けたジャンの愛称だ。実にあざとい呼び名だとは思うが、タマ補正のお陰で特に疑問に思うことはない。ただ、それが伝播してしまったようにサーまでそう呼んでくるのは、少しばかり恥ずかしかった。

「なんでお前は抱きついて寝てんだよ？」

理性が手を離せと囁いている。

だが、どれだけ理性がフルに稼働して腕力を駆使して彼女から引き剥がそうとしても、本能が許さない。故にたゆんたゆんと、肉球顔負けの弾力を味わうように手の中で揺れるだけであり、幾多の刺激を経て、手のひらに硬度を持つた突起が生まれた。

「……ジャーのすべ」

言つて、タマは頬を桜色に染めて、ぎゅっとジャンを抱きしめた。

「と、う夢を見ました」

「なにそれキモい」

タマは心底軽蔑したような視線でジャンを見下ろした。

「ジャー？ なにそれ、炊飯器？」

「いや、その……」

「大体なんで常に燃費の悪い人型になつてなくちゃなの？ ジャンを楽しませるためのマスク Gott ジやないんだけど」

「おっしゃる通りです」

ネコの姿でカンカンに怒るタマは、寝台の上で正座する彼に対し

て、何度も布団を叩いて、尻尾をパタパタと振つて感情を表現していた。

そもそもこうなった理由は、タマが起こしに来た際に布団をひつ剥いで 生理現象を見られてしまったからだ。そこから「ぐる自然的に、「何の夢を見てたの?」という流れになり、現在に至る。

まだその時は怒られてはいなかつた。

だが、先日のタマに対する印象があまりに強かつたせいで見た夢である。

もつとも、さすがにそんな事は口にできないので、秘密なのだが。「あなんでも良いけど。朝」はん食べるなら、用意してあるけど「すぐ行きます」

「もう一度とキモイ」と言わないでよね。嫌いになるから」「はい……あ、最後に一つ、いいですか?」

何か心残りがある。胸の中に感じたそのじつらの正体がわかつた所で、ジャンはそう声を上げる。

後ろ姿を見せたタマは、いかにも不機嫌そうな顔でジャンを見る。

「あによ

ぶつきらぼうに訊いてきた。

言つか、言わざるか。

されど、後悔するならば確實に告げたほうがいい。何もしない後悔は、何よりも苦しいからだ。

「うひ、語尾に”にやあ”だとか”にやん”は付けないんですねか?」「……あの

「口」もるよ」と、彼女は続ける。

「もしかして会話成り立つてなかつた? 言葉通じてなかつた?」

「いえ、大丈夫です。タマの言葉は全て理解できます。今日も可愛いし」

「フォローすれば良いってもんじゃないけど……真性ね。そんなにネコ好きなの?」

「大好きです。もうタマんねえです」

タマの姿が、不意に消える。

否、ジャンの肉眼で尾を引くように肉薄する陰だけは捉えられていた。

音もなく気配が近づく。僅か一秒にも満たぬ時間の中で、その白に茶色にこげ茶の混じる三毛猫は、地面を弾いて眼前に迫った。目の前にニネコが現れた。そう認識するよりも早く、振り薙がれた一閃があった。

それから間もなく、タマは軽々とジャンのすぐ近くに着地する。すうっと、鼻筋から血が線状に三本浮き上がったかと思うと、鋭い痛みが並のように押し寄せてきた。

鮮血が吹き出るわけでもなく、また傷があると教える程度の出血だけがそこにはあったが、痛みは見た目に反して非常に強い。まず目が開けられない。痛みのせいでの思考がままならない。

タマの声は、横になつて悶えるジャンの耳元で聞こえた。

「安心して。消毒してあるから……」やあ

「ぽん、と頭を肉球で叩く感触を残して、気配は走り去るようになぐ遠くなつていった。

「お食事はどうでした?」

暑いからという理由だけでキャミソールを来て、腿までがあらわになる短いズボンを履く女性は、それでも体裁を整えるようにヘッドドレスだけは身につけていた。

そんな彼女は顔や肌、足が驚くほどに透き通るように白く、その腕、足、指に細かく吸盤を付け、また太い四本の房を好き放題に背中に流す頭には、されど髪はなく、髪のよつた触手があるだけである。

彼女はタマ族の異人種であり、この屋敷のお手伝いさんの人だ。「ええ、美味しかったです。なんだか、もっと味わってずっと食べていたかったです」

「あらら、嬉しいことを……ふふ

嬉しそうに彼女は笑う。しかしそんな褒め言葉に頬を紅潮させたり、恥ずかしがつたりするようなウブな姿は一切無く、経験豊富な大人の女性の雰囲気を醸し出していた。

「でも、わざわざスミマセン。最後まで寝てたおれを待つてくれたみたいで……」

長く伸びる机には、まだ口が登つてからそう時間が経つて居ないであろう頃合いのにもかかわらず、ジヤン以外の顔は無い。彼女の話を聞くに、既にテポンはサーーを連れて買い物に出かけてしまつたらしい。トロスは入学してから日課にしているトレーニングに出かけたばかりで昼頃まで帰つてこないらしく、この屋敷に残されたのはジヤンと、お手伝いさん、それにタマだけになる。

「いいのよ、別にやることなんてあまりないし。それに、あまり褒めてもらつたことがないから嬉しかったしね」

「いや、ホントの事を言つただけですし」

「あまり褒めると、サーーちゃんが拗ねるわよ?」

「ああ、そう。サーーで思い出したんですけど、もしサーーが料理を手伝いたいって言つてきたら、断らないでやつてほしいんですよ。あいつ、なんだか料理が趣味だか生きがいみたいで、ずっと料理ばつかしてましたし」

「ふうん……そうね、なら今夜あたり手伝つてもらおうかしり」

そういう彼女は、どこかイタズラっぽい笑みを浮かべていた。怪しく述べて、何か企んでいそうなソレだが、ジヤンには彼女が何を考えているのか皆目見当もつかない。

「それじゃ、オクトさん。ごちそうさまです」

「お粗末さま。あ、ジヤンくん。これから何か用事でもあるの?」

「そーですね……特には無いです」

「ちよつとおつかい頼んでもいいかしら? 他のに頼むと、いちいちつるをくつてね。もちろんお礼はするわよ?」

「いや、大丈夫です。お世話になつていい身ですし。それで、おつかいつてこうのは

「

その男はジャン・ステイールから注文の内容を聞き終えると、椅子から立ち上がり、その埃っぽい空気をかき乱すように乱暴な様子でカウンターを乗り越えてきた。一メートルほど離れたジャンを睨みつけるようにしてから、わざとらしさと言つよりも、どこか演技がかつた動作で、近場の本棚へと向かう。

本棚が無数に並ぶ店内。そして本棚と本棚で作られる通路の、その終着点にカウンターがあつた。

胡散臭い口ひげを生やす男は、髪を脂でオールバックにして、片眼鏡を掛けた紳士然とした外觀だつた。どこか氣難しく神經質そうな顔立ちに反して、その”本屋”は客があまり来ないのか、掃除があまりなされていないのか、空氣中に埃が漂つている。

くしゅん、と顔を揺らしてタマはくしゃみをして、ジャンはそれに続くようにくしゃみをした。

「いつ来ても最悪」

「まあそう言つてくれるなタマゴウチ少佐。奴らから姿を隠すための隠蔽工作の一種だと、何度言つたら分かつてくれるのだ？」

ジャンの肩に乗るタマは不快そうに、店主から視線を外した。

「その名前、わけわからんないし」

「やはりまだ記憶は戻らないのか。やはりガウル帝国の内戦の代償は大きいか……」

店主はそう口にしながら本棚を漁る。

オクトの説明によれば、彼はガウル帝国という、この王国が存在する大陸の向こう側、海を越えた先にある大陸からやつてきたといふ。そこであつた内戦から逃げてきたという説明だが、タマを、その恐らく飼つていたであろう愛猫と信じ込んでいる。しかしその愛称を完全に拒否していたおかげで、今は間をとつてそんな珍妙な名前になつていた。

そしてオクトは、この店を贋賣にしてくる。理由は単に、品揃えが良いからだ。

どんな理由で本屋を営んでいても毎月新書を仕入れるし、客も居ないというわけではないから経営を維持できている。そしてどれほどマニアックな本でも、古書でも妙に揃っていた。

ジャンとて興味がないわけではないが、今日はおつかいだ。また後日、個人的に来たいと思つていた。

「つたく、なんであたしまで連れてきたわけ？」

「いや、だつてオクトさんが、こっちのほうが話が早いつて言つてたし」

「もう……ま、”中佐殿”の様子は相変わらずで良かつたけど、もう一度と來たくないわ……くしゃつ」

また小さくくしゃみをする。首を振り、前足で顔を撫でるように拭いた。

「中佐殿！ ちゃんと掃除してよ！」

「何を言つタマゴウチ少佐、この古臭さ、カビ臭さが良いのではないか。なあ少年、あながちわからんでもないだろ？」「え、いや……まあ。じつじつじつが図書館とは違つ、本屋の良いところでもありますよね」

「おお！ さすがタマゴウチ少佐に見初められた男！ 分かっていないではないか！」

「ですが、せめて簡単な掃除くらいはしたほうが良いのでは？」

「むう、先程からさすがにそこまで言わればしないわけには……」

「と、見つけたぞ少年！ 望みの品はコレで良いのだな？ ははは！ うつかり新刊をしまいこんだから少々手間だったが、見つかって安心だ！」

中佐殿は比較的新しい、革張りの本をジャンに手渡すと、腰に手を当てて豪快に笑う。豪氣というのはこの男のためにあるような言葉な気がした。

本のタイトルは『あなたが死ぬまでにやつておきたい』のこのと『』というも。一見自己啓発本のように見えるが、内容は深い恋愛小説らしい。オクトは最近この作者に熱中しているらしく、すべ

ての単行本はこの店で購入し、新刊を心待ちにしていたとの事だ。

「ええ、これで大丈夫です」

本を念のために確認して、中佐に手渡す。彼はそれからカウンターの奥へと飛び上がるよつに引っ込むと、手早く紙袋に本を入れて、カウンターに置いた。

「お代は既に受け取つているから、このままで大丈夫だ。心ゆくまで堪能するがいい！ っと、少年は何か気になる本はあつたのか？」  
ジャンはそれを受け取りながら、タマの首の下をぐすぐるようにな撫でる。そして不意気味の質問に少し驚いてから、首を振つた。

「たくさん本があつて、まだよくわかんないです。また後日来たいので、その時はよろしくおねがいします」

「ふむそつか……残念だが、待つとしよう。用がなくとも、私はいつでもここに居る。来てくれると嬉しい！」

「は、はい。失礼します」

軽く会釈をするジャンに、中佐は結局本名を教えてくれること無く、敬礼してその姿を見送つた。

あらゆる意味で後ろ髪引かれる思いに駆られながら、ジャンはそそくさとその店を後にする。

「でもジャンが居て助かったわ。いつもなら一人だもん」

氣を良くしたのか、彼女は人型になつてジャンの横を歩いていた。なぜだか衣服は着たままの格好で、四肢はやはり毛皮に、掌は肉球へと変化し、頭にはネコミミ、尻からは尾を生やす。

そして腕を組む、胸を押し付けるといつことはなく、シャツにデニム生地のズボン姿で傍らにつく。肉球、正確には掌球は、その往来でも構わずジャンの手の中にあつた。鷲掴むような形で、他者から見れば手をつなぐように見えているであらうものだ。

「おれもタマと一緒にかつたよ」

「どうせあたしの肉球からだが目的なんじょ？」

「そ、そういうワケじゃないよ！ タマと一緒にいると樂しいし」

「楽しい……？ 可愛いとかじゃなくて？」

彼女はマジマジとジャンを見つめて、首を傾げる。

「うん、と彼はうなずいて、わかりやすく説明した。

「まあかわいいよ。ネコでも、人型でも。でもや、タマと一緒にいると……」 ひつ、一緒に居るだけでも心が踊るんだよね。樂しいって

そういうことだと思つた。

「そ、そななんだ……あ、や、せっぱりジャンって結構変わってるよね。女の子に、みんなにそういうのいるんでしょ？」

いつでも余裕を持つているような彼女は、頬を桜色に赤らめてそっぽを向く。だといふのに、指球はぎゅっと締まって指を包んだ。

「別にそういう訳じゃないけど……この街だと、タマが初めてだし」「は、初めてなんだ。あたしが、初めて？」

「まあ、そうだな」

「へ、へえ。……ねえ、ジャン？」

呼ぶ声に、顔を向ける。タマはそれに応じるように手を離して、その肉球を顔面に押し付けた。

すこし固い角質層の中には、ふにふに柔らかい独特の感触がある。変わらずのお口様の香りがして、ジャンの吐息に、抑えるようなタマの声が聞こえた。

「ジャン、またキモイこと言つたから、お仕置きだからね……つー」

「た、タマ……こんな、み、みんなが見てる、ところだ……！」

「うふふ、肉球つて、結構ピンカンなんだからね！」

すっかり上気してしまった顔を隠すようにそっぽを向きながら、

また肉球を強引にジャンの顔に押し付けて、足早に往来を歩く。

肉球のお陰で他の事に頭が回らなくなってしまう彼の特性に少しだけ感謝しながら、タマはそそくせとジャンを連れて屋敷へと戻つていった。

ジャンはまた、不意打ちの幸福を堪能して。

そういうひしてくる内に、楽しい休日は終わりを告げた。

「なんだか、家で上手くやれてるよ」僕は安心したよ

「よいよ春が終わろうとしている季節。街路樹は青々とした葉が生い茂り、青空は澄み渡る。清々しい朝に、共に家を出たトロスは笑顔でジャンの肩を叩いた。

「いや、みんな何だかんだで親切だし、良い人ばっかだしな。環境も持て余すくらいだし、本当に感謝してるよ」

「何言つてるんだよ、僕だって、キミが試験の時に声をかけてくれたから学校でも、試験でも上手くやれたんだ。それに、家だとお手伝いさんの手伝いまでやつてるんだろ?」

トロスはそう言つたが、手伝うのは食器の片付けや簡単な掃除、庭の手入れくらいしかやれていないし、それだって本当に手伝い程度だ。それが彼らの手助けになつてているかは、未だに疑わしい。

そんな彼らが歩く通りはいつものように警ら兵が街を巡回していく、住民が日常的に歩いていている。これから仕事に行くものや、ペットの散歩、井戸端会議をしている主婦層などその様相は様々だが、平和なには変わりがない。

妙なまでに満たされている感覚がジャンの中にはあつて、思わず頬は綻んでいた。

「でもジャン、最近なんだか私にかまってくれない……」

彼らの前でテポンと仲睦まじく、それこそ姉妹のように話していたサニーは、そんな会話が耳に入つたのか振り向いてから、むつりと膨れた。テポンは宥めるように彼女の頭を撫でる。身長差は頭一つ分で、テポンがやや大人っぽいお陰でサニーの外見年齢は如実に下がつていていた。

「登下校と家、学校で一緒にじゃないか」

「ちがうの、だって前ならもつとお話をしたり、色々してたもん」

「んな事言つたつて……これ以上一緒に居たら、一日中ずっと傍に

居ることになるぞ？ お前だつて友達とか居るだろ。ほら、クロコ

とか、なんつたつけ……ハイビスカスの人とか

「ぐ、クロちゃんとアオイちゃんは学校でいつも遊んでるし、学校

帰りで一緒に遊ぶ事もあるし……」

「いつでも会えるおれより、そういう仲良くしてくれる友達を

遮るように、トロスが再び肩を叩く。

大人気ないぞ、といわんばかりの表情に、些か無粋すぎたかと己の台詞を思い返した。

だがそれとは全く異なる、思いも寄らない一言は果たして放たれたのだ。

「キミはまだ気付かないのか？」

「……何をだよ？」

「これまでサニーちゃんとずっと一緒に居たんだろう？」

「まあな。それが当たり前みたいなもんだつたし」

やれやれ、と肩をすくめるトロスに、ジャンは彼が何を言わんとしているのかをなんとなく悟る。

だから彼は首を振って、

「強調するわけじゃあ無いが、物心ついてからずっとサニーと一緒にだつたんだ。今更、何かが変わるわけじゃない

「……ジャンは私の事きらい？」

うつむきがちでサニーが言った。上田遣いでサニーが責めた。ジャンはいよいよ、なんだか彼女に悪いことをしていいような気がして、

「好きだよ。……わかつた、一緒に居ればいいんだろう？」

「うん！」

嬉しそうな、子供っぽい笑顔を見て、彼もまんざらではなさそうに微笑んだ。

学校と外との敷地を区別する鉄門を過ぎると、土がむき出しになる訓練場には人だかりができていた。野次馬とも形容すべきその群

グラウンド

れは円くなつて、その中央にある程度の空間を残す。

互いに剣を、あるいは槍を構えた二者には素人が見て分かるほどに揺らぎがない。子供のケンカという様相は一切無く、今まさに血しぶきが宙を舞い鋼鉄の乱舞が周囲を切り刻まんとする威圧的な雰囲気が、周囲を包んでいた。

「……あの、何が始まるんです？」

最後尾にて、その巨躯を活かして中を覗き込むクマのよつた鋭い爪を持つ男に声をかける。また毛皮を肌に癒着させる姿は、まさにクマといった風体だ。

彼は前を見つめながら静かに告げる。

「いや、それが良くわからねえのよ。俺がここに来た時はもう二つだつたし、沈着してるし……ほら、周りを見てみる。みんな飽きて校舎に入り始めてる」

促されるように周囲に眼を向ければ、円を作る要素となつていた詰襟の白い学生服の連中、あるいは大きな襟や胸元のリボンが特徴的な制服の女子生徒らは、徐々に数を少なくしている。

リボンが紅い、あるいはボタンが銀であるのが一年、水色で金なのが二年であるが、そのほとんどは二年だった。残つているのは一年のみであり、よく見れば、声を掛けた生徒は上級生だった。胸元のボタンを外して露出する格好は、野性味溢れる男らしい姿である。

「まあ、いつもの事だうけど……前からは随分期間が空いてたしなあ」

「いつもの……とは？」

「いつもの……とは？」  
ん、と反応して男は振り返る。それからジャンルの姿を一見すると、なるほど、と手を打つた。

「あいつらは犬猿の仲つづーのかな、良くな喧嘩してて、ヒートアップするといつでも得物を出して戦うんだよ。最近はそれを止める奴が居たんだが……どうやら今日は居ないらしいな。だからこうなつた。ま、決着がつくか飽きるかすれば教室に戻るだろうよ。お前ら

も、遅刻すんなよ」

男はカツカツカと笑うと、それからジャンの頭を幾度か叩いて、校舎へと戻つていった。

気がつけば野次馬も随分と数を減らし、隙間から中の様子を伺うことが出来る程となつてゐる。

「ねえジャン、教室行こ？」

「ああ、そうだな。見ていても仕方が無いし」

飽きたのか、あるいはそういうた鬭争を眼にしたくないのか、サニーの提案にジャンは従つた。

そうして彼らに背を向ければ、やがて鋼鉄がぶつかり合う音、さらには咆哮が耳に届く。また背中を押すような凄まじい威圧を感じながら、かくして彼らは昇降口へと向かつていつた。

その刹那の事だった。

「唸れ、剣風ウツ！！」

尋常ならざる衝撃が、振り下ろされた剣から離れて斬撃と変異する。刃状の巨大な旋風は空間を断裂する勢いで男へと迫り、大地を削り深い溝を作りながらやがて接触。構えた槍の穂先が甲高い悲鳴を上げるよう、空気が切り裂かれる摩擦音、さらに金属を削る摩耗音を大気に伝播させながら、火花を散らしていた。

だが、勢いは殺し切れない。

間もなく体勢を崩して吹き飛ばされる男は、搔き別れた人波を通過して迫る。

何も気付かぬジャンの背へと肉薄したその陰は、結局そのままごく自然的に彼を巻き込んで倒れこんだ。

大地に、重なつて倒れる二人。が、巻き込んだ張本人は白く染まり上がる長髪を乱したまま、ジャンを弾くようにして横に飛ぼうとして、舌を鳴らす。

「くそ、邪魔くせえ！」

片膝を付いて半身を起こす。そのまま槍の柄を地面に突き刺すと

得物を握る腕から紋様が浮かび上がり、それが槍へと伝播する。袖を捲るが故にあらわになる腕、複雑な紋章。紅く輝き槍にさえ

もソレが刻み込まれ、大地に干渉した。

「グレイト・ウォール空間の障壁ッ！」

果たして魔術は発現する。

腕、槍ともに刻まれた紋様が一様に虚空、その槍の手前に弾かれて浮かび上がる。紅い輝きがそれと共に、槍を中心点にした半円形の盾のような障壁を創りだした。

追撃と思しき衝撃波からなる斬撃は、再び大地に深い傷痕を作りながら切迫し、衝突。眼前で空間の中にそこにあるという確かな姿を作つて現れた斬撃は、第一打で障壁に決定的な亀裂を入れる。が、破壊されない。

さらにジリジリと押し殺すように剣風は障壁を碎き、無数のヒビを刻み込んだ。斬撃は途絶えず、されど威力は徐々に殺されて、やがて途絶える。吐息のような小さな旋風となつて失せた斬撃は呆気無く、共に白髪の男は口角を吊り上げ、この瞬間を待つていた。

全身に流れる心地よい衝撃に四肢を震わせ、一撃のみならず追撃を許して守備に転じた男は、されどこの事態を喜んでいた。

障壁は役割を終えて、間もなくバラバラに、ガラスが砕けるように虚空の中に散っていく。だが、空氣中に溶けることはしない。

それを構成していた魔術的因素を持つ破片はそのまま矢尻の形を作つて、さらに箇<sup>。</sup>つまり棒の部分、さらに矢羽を構成する。槍はやがて弓と相成り、弦は同様に穂先と、大地に突き刺さる柄尻とを繋ぐ。

男は手馴れたように矢を取り、弦に引っ掛け力一杯引き寄せる。張り詰めた弦は今にも断裂してしまいそうな雰囲気を纏いながらも、力強く、その威圧をも孕む。

攻撃を防いだ刹那の出来事。

対する男が、その攻撃手段を理解するよりも早く、やがてその矢は虚空を穿つ。

大気を切り裂く一点の矢は、鋭く、吸い込まれるように男に迫る。

同時に男は、槍を引き抜いて大地を弾いた。

守備から攻撃への、乱雑とも流麗とも受けて取れる流れ。

男は咆哮さけぶ。

「賢あしいんだよ、てめえは！」

「貴様にや負ける！」

振り上げられた剣先に、紅い輝きを纏つた半透明の矢尻が触れる。その集中力、判断、対応。全てが常軌を逸していた。まともな動体視力では反応できるはずのない矢に動き、さらに線から点へと転ずる突きの攻撃を活かして対する。また、障壁を矢へと展開する柔軟性。

異形とも見れる実力は、やはり騎士志願ゆえのものなのだろうか。単なる才能や努力では決して覆せないのであろう印象は、僅か数度のやりとりだけで心に刻まれる。

やがて矢が碎けて、突撃が勝利を収める。

再び距離を縮めた両者だが 。

「何をしとるか貴様らアアアアツ！」

戦闘教官の乱入にて、何らかのパフォーマンスにも似たケンカは、終わりを告げるのだった。

「なんかすごい人たちだったなあ……」

教室で、机をあわせて弁当を展開。

始まる昼食の最中にそう漏らしたのは、ジャン・ステイールだった。

多くのクラスメイトは食堂へと向かい、残るのは昼食持参組のみ。今日はトロスと、クロコ、アオイ、サニーという面々で、それぞれ向かい合わせになつて席につく。

残る三人ほどのグループは窓枠に腰をかけるようにして、あるいはその対面の机に腰をかけて、登校時に購入したのであるパンを食んでいた。

「あ、それ私見てましたよ」

と口にするのはアオイだ。頭に側頭部にハイビスカスを咲かせて、スカート代わりに大きな花弁を腰に纏う、植物族の娘である。ただそこに居るだけでなんだか暑くなるような気がする、常夏気分にさせてくれる女の子は、妙に丁寧にジャンに反応する。

「あんな戦闘、初めて見たんですけど……圧巻でした

「に比べてお前という男は……」

クロコはわざとらしく肩をすぼめて、鼻を鳴らした。果たして彼女にケンカを売っている自覚があるのかどうか、甚だ疑問である。「し、仕方ないだろ！ 後ろから飛んでくるって予想できないし、対応できないし！」

「でも避けられるだろ？」

「よ……そのとおりだよ！」

「うわ、開き直った」

トロスはサニー特製の弁当に舌鼓を打ちながら、苦笑しつつそぞ漏らす。

「でもジャンも怪我が無くてよかつたよね」

「確かに、アレで怪我したら笑えないし」

サニーはいいタイミングで助け舟を出してくれる。やはり付き合いが長いだけに、どこで困っているのか、どこで助けて欲しいのかがよく分かつていて、だからこそ大助かりだ。ジャンは手を伸ばして、サニーの頭を撫でてやる。

彼女は嬉しそうに首をかしげて、横に並ぶジャンに寄り添つた。

「なんか……どちらかって言うと微笑ましい感じだよね」

「確かに」

「ですね。ほんとの兄妹みたいです」

ほんわかと、落ち着いた雰囲気。

そういった日常が構成されて、ジャン・ステイールは一日の大半、全てと言つても過言ではないほどに、その殆どを異人種と共に過ごしていた。

だから「いや、と黙つぐせなか。

「ジャン！ ジャーン！」

妙なことに巻き込まれるのも、割合が多くなつていった。

彼の名を叫びながら廊下を走り、そして教室に飛び込んできた姿は小さく、四本の足で床を彈くとそのままジャンの後頭部に突っ込んだ。

ネコはやうして頭に抱きつくる、ポンポンポンポン肉球で頭をたたき、どうやら錯乱しているらしいう事を教える。

「ど、どうしたんだよタマ？ つていうか、なんで学校に」

「助けて、しょ、しょ……」

「しょ？」

「触手が……地下から、なんか出てきたのよー。」

## 地下の呪い～学校の七不思議～

まさか、地下室というものが本当にあるとは思わなかつた。

ジャンは、及び腰のタマを肩に乗せて、食事が終わり次第教室を飛び出していた。

向かう先は、校舎裏。地面に埋め込まれている床収納庫の扉のような蓋がある、焼却炉から程なく近い場所だ。

今ではその蓋は開け放たれていて、よく見れば『封』と書かれた紙が半ばから黒い炭に変わっているのがよくわかる。

「またなんでこんな所に……」

「だ、だつて怪しい匂いがブンブンしてたのよ？ 行くつきやないじゃない」

「ていうか、なんで学校に？」

「いい加減暇だつたのよ」

すまし顔でタマが言った。

面倒事を持つてきたといふにこの表情である。手馴れたものなのだろう。

が、ジャン自身興味がないわけでもないし、まんざらでもない。だからまず教員を呼ぶより、先に自分で確かめたかったからここに来ていた。

護身用に持ち歩いている短刀を腰のベルトにくくりつけて、下りの階段となるその中へと足を伸ばした。

明かりには、魔石を使用した技術の粋である携帯式の電灯がある。筒状になり、先頭に装着した魔石が僅かな光を吸収して増幅、そして切り替え装置によつて点灯を操作できる。

人造の石材で塗り固めてある階段や壁、天井は冷たく、中に入るだけで空気の冷え込みを感じることが出来た。ジャンはそれから、ポケットから電灯を取り出して付ける。と、十数段の階段を下りた先にある通路の奥。硬く閉ざされていたであろう鉄の扉が半分だけ、

口を開けているのが見えた。

長い間人が踏み込んだような形跡は無く、通路の床にはタマの足あとだけが残つてゐる。

鼻を突くような腐臭にジャンは袖口で鼻を抑え、階段を降りてから、少しばかりそこで立ち止まつた。

扉の向こう側に、強い気配を感じる。

それが、彼女が言つていた触手なのだらう。

だが、触手があるとなれば、それを操る、その元になつている存在があるはず。しかしながら、長い間人が寄らないこの地下で、果たして生存していられる生物などが存在するだらうか？

さらにこの、騎士養成学校の敷地内にあるといふのにも疑問が生まれる。

封印されていた、と考えられるが、なぜこの場所に。そしてまた、それはどのような姿なのだろうか……。

疑問は重なり、解消されない。

ジャンはその淀んだ空氣を衣服越しに吸い込んでから、小さく頷いた。

「行くぞ、タマ。準備はいいか？」

「あたしはできてる」

「よし……！」

タマはジャンの首元に顔をうずめて待機する。

彼は重い一步を踏み出して、さらに一步、もう一步……やがてやがて、やがて扉の前へと近づいた。

電灯を持つ手で、扉に手を掛けると

『だれ……？』

淀んだ空氣に鈍く伝播する聲音。

声帯を潰されたような、醜悪な声。

だがそれは確かに言葉となつて、ジャンへと投げられた。

思わず腰が抜けそうになる。高鳴る心臓が今にも破裂せんとして、ジャンはそのまま扉を掴む腕に寄りかかるように停止した。

言葉が通じるのか？

臭気がより強くなるのを感じながら、ジャンは考える。

異人種なのだろうか。

人と同じ程度の知能を持つ生物。さらに触手を持ち、長い間地下空間で生きながらう事ができる生き物……少し考へても、それがなんなのか、ジャンの頭の中に該当する存在はない。

しかし異人種だ。人間側からしてみれば、ある意味何でもありのような生物である。

これまで人間界に、表面上でも溶け込んできたのは、この世界にそもそも存在している生物と同化したような異人種だ。たとえば獣、あるいは植物、軟体動物、爬虫類。種類数多で、恐らくまだ見ぬ種族もある。

その中に、こういった生き物がいても、なんら不思議ではない。この世界の科学が通用しないのだ。ありうる話である。

ジャンは息を飲み、少しだけ考へてから、口を開けた。顎が震える。足がガクガクと揺れる。これが恐怖ゆえなのか、興奮ゆえなのか、自分でもよく分からない。

「か、勝手に入つてすみません。あの、気分を害したのでしたら、すぐに帰りますので……」「…………だれ？」

果たして言葉に返答はやつてきたが、それは会話として成り立たない。

あるいは。

彼は考へて、よつやく告げる。

「ジャン・ステイールです。この学校の、一年です」

言つてから、少しだけ後悔した。

こう言わなければこの場を乗り切ることは出来なかつたかもしれない。だが、噂に寄ればこいつは『呪い』だ。名前さえあれば、人を殺すくらいなんでもないかもしない。そんな存在、権化なのかもしれない。

そうだ。生物である確証などもとより無かった。

魔術によつて生まれた意識のある何かのかもしけないし、科学によつて作られた何かのかもしけない。何よりもこれを生物と断定するにはあまりにも情報が少ないし、早計すぎた。

早まつてしまつたか……そつ考える最中に、扉の隙間から何かの陰が現れた。

ぬるりと粘膜をまとわりつかせる、一本の流線型の何か。くすんだ紅い色はむき出しになつた真皮のようだが、鮮血が漏れる様子はない。触手と呼ばれるそれは、その身を起こすとやがてジャンの膝くらこの高さにまで持ち上がつた。

『きて……』

鈍い声音は、触手の手招きと共に發される。

それは幾度か頭をさげるよつて手招いてから、ヌルヌルと蛇が這うよつて部屋の中へと退いていった。

「行くの？」

首に抱きついて目を瞑つたままのタマは、小さな声でそつ語く。「行くしか、ないだろくな」

既に選択肢といつものはないよつた氣がする。もつ巻き込まれてしまつたのだ。こつすることは、仕方なの無いことなのだ。ジャンは大きく息を吐いてから、扉の隙間にその身を滑り込ませるよつにして、空間の中へと入つていつた。

中に入ると、まず床の感触が途端に変わつたことに気がついた。分厚い苔の上に立つよつた感覚。不安定で、ぬめり、そして歩けばぬぢやぬぢやと粘液がすれ合つ音がする。電灯を床に向けると肉のよつな何かが、一面に敷き詰められていつたことがわかつた。それだけで腰が抜けそつなのにもかかわらず、教室ほどの広さを持つその空間の中央には、巨大な柱のよつなものがあつた。

包み紙でアメを包んだよつて、中央部はやや膨らみを持つ。そしてそれは、まるで心臓のように鼓動していた。床は主に肉で埋まり、

また小さな触手が刺激に反応して現れる。いわば、腸絨毛のようなそれらだった。

さりに壁には薦が這いつゝ、触手や肉がこびつつく。その全ては蠢いていて、呼吸をするよつて臭氣を放っていた。

耐えられない。

あまりにも世界が違すぎる。

氣色が悪いとか、気持ちが悪いとか、それについたもので括れる空間ではなかつた。

最悪だ。

予想を上回る事態を田の当たりにして、尚、彼の足はその柱、声の主と思しきものへと近づいていった。

『きてくれた……ほんとにきたんだ……』

肉の柱。膨らみを持つ部分には、その空間には酷く似つかわしい姿があつた。

透き通るような肌。鮮血のよつて、その肉と同化するよつな色のワンピースを身につける、銀髪の少女。四肢は肉に取り込まれるよう、まるで磔にでもされているような姿がそこにはあつた。

おやじくこれが外界と接触するための装置と言つべく部分なのだらう。

そう考えれば、この空間内の肉やらそれらが全て、ひっくるめて一つの生物といつ事になる。

「い」、「きげんよつ」……？

挨拶を試みる。

『「きげんよつ」……』

返された。

「お、お名前は？」

『「ない」……』

「そ、それでは、ちよつと……おことましよつかなあ、と思つます」

言つて、ごく自然的に背を見せぬ。

その瞬間だった。

粘液が音を立てる。肉から剥がれた一振りの触手が、その本体と言つべきソレから振り抜かれて 刹那。彼がその肉薄を理解するよりも早く、触手はジャンの腹に巻き付き、宙に持ち上げた。

電灯が手からこぼれ落ちる。照明は、吸い込まれるように本体へと近づいていく様を照らしていた。

「う、わああああ

つ？！」

『まつて……』

身体が肉塊に叩きつけられる。ぶよぶよとした奇妙な感覚に身体が埋もれた。

『おともだちに、なつて……』

タマは引っ張られる最中に落ちたのだろう。その通過点で、口から魂を吐き出すように倒れていた。精神が過負荷に堪え切れずに気絶してしまったらしい。

「お、お友達…………ですか……」

『おともだち…………』

繰り返す。

そうすると、不意に肉塊の手前から勢い良く触手が突き出るように出現した。

それはうねうねと、見えざる手によって粘土細工が加工されるよう、触手はその形を変異させる。

人のように一本で一対の腕が生まれ、五本の指が作られ、また胸には未発達な膨らみ、まだくびれは無く寸胴、そしてぷつりと肉から引き離された触手は、やはり一本の足を生やしていた。

色が変わる。

先ほどの境界面と同様に、人間のよつた肌を持ち、腰までの長い銀髪を生やす。くすんだ、生氣の無い瞳はそのままだが 何も知らなければ、その姿はそのまま人間に見える。人間以外の何者でもない姿だ。

やがて少女は、紅いワンピースを纏つて、裸足のままで肉の上に立ち、触手に握られ肉塊に叩き込まれるジャンの姿を見上げていた。

『あげる……がつこいつはかよづ。おいつぢは、しーじ……』

鈍い声音は続けた。

『おともだち、なつてほしー……』

何が目的なのか。

そもそもコレは一体なんなのか。

その全てが、意識的に彼の頭の中から排除された。

生存だけを考える思考が彼を突き動かし、口を動かす。言葉を紡ぐ。

「お友達に、なりましょう……！」

精一杯に吐き出されたその言葉を最後に、ジャンの意識はぱつりと途切れた。

「ジャン！ ジャーン！」

名前を呼ぶ声と共に、身体が大きく揺すられる。共に、深く沈んでいた意識は呼び起こされて、浮上。

ジャン・スティールの意識はそこで覚醒した。

「……はっ！」

反射的に眼は開き、そして同時に心臓が激しく鼓動する。

彼の視界には心配気な視線を送り、今にも泣き出してしまいそうな人型のタマがあった。

タマはジャンが目を覚ますと安心したように大きく息を吐き、それから見る間に縮んで、猫に戻る。

「もう、死んじゃったかと思った」

「こ、ここは……」

震える声で告げるタマの頭をやさしい手つきで撫でてやりながら、彼は身体を起こす。周囲を伺ひように首を回せば、そこは校舎の裏。焼却炉の近くだった。

振り返れば、大地に埋まる蓋は閉まつたまま。

彼はそこでよつやく胸をなで下ろして、深く息を吐いた。

「良かつた、おれを襲う触手はいないんだ……」

そう漏らすと、背後から凄まじい衝突音が鳴り響いた。まるで壁に勢い良く馬か何かが突っ込んだような音に、衝撃。彼は慌てて立ち上がりて振り返ると くるくると、蓋は宙を舞っていた。

やがてそれは角の部分を深く大地に突き刺すと、殆ど同時に、それは着地した。下には何も身につけていない少女は肩までワンピースを翻してから、ゆっくりとしたようすで落ちていくその衣服がやがて地面に触れてから、緩慢な動作で立ち上がる。

くすんだ黒い瞳がジャンを見上げた。少女は裸足で仁王立ちする。「呼んだ?」

そうして声は、いかにも少女らしく澄んだ聲音となつて言葉を紡ぐ。

「呼んでません」

「そう。残念。ちなみに、本体から離れられるのは、一時間までだから。過ぎると腐っちゃう。臭くなる」

「頑張つてください」

「ありがと」

慣れない言語を一生懸命使つよつて、拙くも、彼女は先程よりも遙かマシな声でそう教えてくれる。

もしかすると、この学校の七不思議となる一つを、そして最大級のその不可思議を解けるかもしねない。さらに恐怖さえ忘れてしまえば彼女だつて、普通に接することができる。

食われることは……ないだろ? そうだ、あの地下で生きて行けるのだから、食事やら何やらは不要なはずだ。

ならば大丈夫。

おれは大丈夫。

彼は頷き、自分を納得させる。

「ま、そういう、事だから。よう

……どこでそんな言葉遣いを覚えるのだろうか。

台詞に関してはまだ本体のほうが可愛げがあつたかもしれない。手を差し出す彼女に、ジャンは対応してその小さな手を握り返し

た。

「よろしく、ノロ」

「ノロ?」

首を傾げる彼女を指さすと、彼女は自分で自分を指さした。

「ノロ?」

「そう、君の名前だ」

名前の由来が呪いだと知られたら、本格的に殺されるかもしれない。

そう思いながらも、口をついて出でてしまつた以上引き返せない。時間程度を巻き戻せない自分を不甲斐なく思った。

ジャンが言うと、彼女は僅かに、口角を吊り上げた。

「わたしの、名前」

「そうだ。名前がないと不便だからな。それじゃ、ノロ、悪いがあればこれから授業だ。帰るからな」

「うん、わたしも準備が必要。学校は来週から」

「そいつは良か……残念だな。それじゃあまた今度!」

「うん」

畳み掛けるようにして、ジャンはタマを強引に肩に乗せてから、ノロに手を振り背を向ける。

なんだか奇妙な罪悪感に苛まれながら　　ジャンは教室に戻る。  
閑散とする、誰もいないその様子から、既に時刻は放課後を過ぎていることを理解するのは、それから数分後の事である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1050x/>

---

続・knight of monster ナイト・オブ・モンスター

2011年10月10日03時11分発行